

インターカルチャー

INTERCULTURE

NO.74

2001年3月号

MARCH



学校法人 千里国際学園 Senri International School Foundation (SISF)

千里国際学園中等部・高等部 Senri International School (SIS) 併設 大阪インターナショナルスクール Osaka International School (OIS)
〒562-0032 箕面市小野原西4丁目4番16号 TEL 0727-27-5050 FAX 0727-27-5055 URL <http://www.senri.ed.jp>

卒業生に贈る言葉特集
環境作文で最優秀賞受賞
海外・国内入試結果報告
APAC女子サッカー 2位
SIS/OIS高等部生徒会選挙結果



2/16 冬季コンサートより

10年、原風景

大迫弘和
SIS 校長

10年という時間が流れました。
B4版1枚両面刷りから始まったこのインターカルチャー一つ見てみてもこの10年で74号を発行したことになりました。

10年。この間、SISは、次のことを築きあるいは守り通しました。「一人一人の生徒を大切に」を実現するために。

学期完結制という学習システム
OISとの合同という基本構造
24名を最大とする少人数学級
カウンセラーを中心とする生徒の心のケア体制

5 respectsを掲げた学園生活

このような教育の形を、2001年という現在の段階で日本という国の中で実現しているのは、間違いなく私たちSISだけです。そのことは自信をもってお伝えできます。

それ以外にも、バイリンガル図書館(及びその活用のされ方)であるとか、コンピューターを使つての教育/校内LANとか、そしてなによりそれぞれの授業の内容であるとか、それこそ今も引きも切らず訪れて下さる見学の方々がある種驚嘆の声を上げられることどもが、それこそ枚挙にいとまがないくらいあります。

これらのことの実現、維持のためには、言うまでもなく、先生方、職員の皆さん、お一人お一人の献身的な努力があったわけですが、それだけでそれが実現されようもない、即ち、保護者の皆さまの深いご理解とご協力、多大な財政支援をし続けて下さっている多くの企業(そこに勤務されているお一人お一人の皆さま)、そしてなによりここに集うてくれた生徒の皆さんのなんとも豊かな才能、心の豊かさ、暖かさ。それらが全て揃って、はじめて実現できた、ひとつの奇跡のような出来事であったと思うのです。

今、ここに改めて、学園の、全ての関係者に心より感謝し、10年の時間をと

もに構築しえた喜びを分かち合い、祝福しあえればと願うのです。

SIS固有のシステムに大いなる自負を覚えつつ、そして、それが、実際、一人一人の生徒を大切に、という主題(帰国生徒の受け入れを主たる目的として創設された学園であることは間違いないが、一人一人の生徒を大切に、という主題はその創設の目的を越え、ここに集うた生徒の全てを、その生育背景に拘わらず責任をもって学園はお預かりするのだ、ということの意味し)の実現に結びついてきた、という実績に誇りを感じつつ、そして勿論、私たちは、私たちが抱える課題に、力を合わせ取り組んでいかななくてはなりません。

その時、10年という時間が、謙虚に見つめ直されなければなりません。

10年。

昔はよかった、という言葉語るには十分な時間の長さかもしれません。1991年4月、中学1年生に15名の一般生徒が在籍しただけで、あとは全部帰国生徒、外国籍生徒だった、即ち中学2年生から高校1年生までは生徒全員が帰国生徒、外国籍生徒だった(高校2、3年生は生徒受け入れを行わなかった)、全生徒数101名のスタートでした。それこそ世界各地、日本全国からはせまじた先生方と、101名の生徒達で、歴史の幕は開かれました。

なんと熱く濃密な時間だったこと。

しかし、それは、10年という、時間の中で、おそらくは「原風景」として位置づけられるものであり、ときに郷愁的に語られることはあってもよかるうが、目指すところのものではないでしょう。

作家野坂昭如は、戦後焼け跡闇市を原風景として持ち、戦中戦後を徹底的に作品化しつづけ「焼け跡闇市派」と名乗られるに至り、現代演劇界を疾走する野田秀樹は赤軍浅間山荘事件を自ら

のバーチャル原風景と語ります。

「原風景」とは、出発点であり、そこから、一体どこに進んでいくか、そのことが問われるものと思うのです。

10年。

学園を取り囲む日本という環境は大きく変わりました。世界も勿論変わり続けています。まるで地球の自転の音が聞こえてくるような、そんな激しさで。

10年前、今街に溢れている携帯電話など、殆どみかけなかった、たった一つ、そのことを考えるだけで、現代、という時代の本質、また、そのなかで行われる「教育」という仕事の必然的な変質、そして変えてはならない「普遍」のことを思わずにはいられませんが。

10年。

大切だったものが希薄になっていくのに十分な時間もかもしれません。

変わったなにかを、「希薄化」か、あるいは、時代の、生徒の変化に対応していった適正な「変換」であるか、見分けることが大切です。

これから、文部省その他、日本の国で、これからの教育、として語られること(又は今語られていること)を、どうぞ注意深く聞いてみて下さい。10年前、既に私たちの学園が掲げていたことが、やっと、言葉として、語られ始めたことにお気づきになられるはずで

10年。

私たちは、先進校、としての役割を、特に意識してきたわけではありませんが、しかし、生徒一人一人を本当に大切にするにはどうしたらよいか、ということだけを真剣に考え続けてきた結果、知らぬ間に、教育先進校、になっ

てしまっていた。

そういうことだと思います。

< 寄稿 > 蛇の誘惑

藤澤 皖
SIS 初代校長

今年も卒業の日に、愛すべき彼らに、SISで学べてよかった、と、保護者の方々から、SISにお任せしてよかった、と、そのように言っていたら、本当に嬉しく思うのです。

最後に「インターカルチャ第1号 1991年10月発行」に、「生徒部（10年の中で、この生徒部自体が廃止されましたが）より」として私が書いていた文章を再録させていただきます。今より10歳若かった自分、ちょっと気恥ずかしくもあるのですが、「原風景」として。

『Take Time』

わたしたちの一人一人の文化、生徒たちの一人一人の文化、それらが正しく平等なものとして向き合うこと。/ ゆっくりと、そして確かに流れていく時間。その中で、ていねいに、ていねいに、生徒たち一人一人の文化のことを思うこと。/ 文化とは、ものの考え方であり、ものの考え方の外への表れ方であり、ものの考え方の受け入れ方である。それらに関する差異の徹底的容認。/ たとえば生徒の髪の色、スタイルに関する「校則」をつくるため、口角泡飛ばし延々の議論をなす、そのような時間があるのなら、わたしたちはその時間を、風を見、一篇の詩を書き、光に包まれ、一枚の絵を描く、そのことのために使うのがよい。/ 「五つのリスペクト (respect for self/others/learning/environment/leadership)」。その深化。わたしたちの目指すものが、具体的には、そういったことで、現実のものとなっていく。/ たちかえりつつ、目をそらさずに。たどりつくべきところ。もどるべきところ。

お正月に、利根川の近くの布施弁天に出かけてみました。弁天さんは川の神様で水のあるところによく祀られています。神殿の前には、蛇の形が自然に浮き彫りになったという石が置いてありました。古来、日本では、水に縁のある神の使いのように扱われていますし、今年は巳（み＝水）年の故、特別なのでしょう。一方、執念深いものの代表にもなり、若僧の恋人に裏切られた娘が大蛇に変じて、隠れていた釣鐘もろとも焼き殺すという紀州道成寺の安珍清姫の伝説も生まれています。

キリスト教の聖書の中にも、蛇はよく登場しています。

モーセとファラオの争いに、神力で蛇に化すというアロンの杖(*1)、魔除けになった青銅の蛇(*2)の話もあれば、「蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい。」(*3)というように賢い生き物ともされています。中でも、有名な話としては、宇宙の創造について語っている創世記に、エデンの園で、神が食べてはいけないと命じた、美味しそうな木の実を、「それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」(*4)と言ってエバに勧めたのは蛇であるとのこと。エバはアダムにも渡したので彼も食べました。この二人は神のことばに逆らって、蛇の姿をしたサタン（悪魔）の誘惑に負けたので、楽園から追放されることになるのです。キリスト教的に言えば、神に背いたという意味で、人間の罪の始まりとされています。神話といってしまうとそれまでですが、私はこのお話から次のようなことを思います。

第一に、人間は「善悪を知る」ようになったと言いますが、本当にそうでしょうか。ものごとが善であるか悪であるかの判断ぐらいはだれでも出来ると言いきれるのでしょうか。最近の世相を見ていると、17歳の少年から55歳の社会的地位のある人まで、善と悪の区別がつかない人が大勢いるような気

がしてならないのです。コンピューターなどによる合成画像で生み出された、現実離れのした世界を見せられることも多くなりましたので、仮想と現実の違いも分かりにくくなりました。また、生活が少し豊かになりますと、さらに手に入るものは何でも欲しくなり、抑制が利かなくなるということもあります。そこには、人間の行為として、善とか悪とか考える余裕もなくなってしまいかも知れません。

第二に問題としたいのは、エバもアダムも自分の判断ではなく、他からすすめられるままに行動している点です。まわりの人たちと同じことをしていれば無難という社会を予測しているように思えるのです。そういう所では、外国から編入してきた子どもたちが、他の人たちとは異なった、ユニークな考えや行動をとったりしますと、奇異な目で見られることがあるかも知れません。天気予報で、「夕方には雨が降りますから、折り畳みの傘を忘れないように」などと言われ続けていると、傘のことまで自分で判断することも出来なくなるのではないかなどと心配してしまいます。何事も言われたとおりでは、アダムとエバの木の実の話のように、責任は自分でとるのではなく、他へ転嫁してしまうことになります。

また、エデンの園の話に戻りますが、人間が善悪を知ることは、サタンの誘惑に負けて神に背くことになるのでしょうか。これが今回の主要なテーマです。

人間に善悪を判断できる能力があるのは、人間の特権ではないでしょうか。容易ではないこととしても、悪を避けて、どれだけ善に近づくことが出来るか模索してゆくの的人生だと思のです。そのことがサタンの誘惑に負けることに結びつくとは思えないのです。しかし、よく考えてみますと、自分が善にもとずいた行為をとっている

(次ページへ続く)

卒業生に贈る言葉特集

大迫弘和

SIS 校長

SISを大切に思ってくれたように
日本という国のことを大切に思っ
て下さい。

日本という国を大切に思うように
世界というものを大切に思っ
て下さい。

世界というものを大切に思うように
あなたというたった一人のかけがえ
のない存在を

大切に、大切に思っ
て下さい。

皆さんの未来に幸多かれ！

ご卒業おめでとうござい
ます。

田中 守

1組担任 理科

学年の担当になって1年と7カ月。
自分で指折り数えてみて意外でした。
もっと長かったような気がして...。ど
うやら知らぬ間にどっぷりと深みには
まってしまったようです。想い出はほ
んとに山ほど、それも「濃い」のが
いっぱいです...

今振り返ってみて、ほんとにすごい
なあって思うことがあります。学年旅
行の時も、そしてこの卒業に向けての
準備の時も、見事でした。普通「みん
なで力を合わせる」のは、ある程度妥
協の上に成り立つものだと思っていま
した。でも、君たちが見せてくれたの
は、いろいろな「力」をそのまま重ね
て成し遂げていくことができる凄さで

した。何かを始めようとする、いろ
んな意見が噴出。いつもどうなること
かと、はらはらしていました。でもい
つの間にか必ずうまくいってしまう。
そのときどきにもっとも適した人が自
然に旗を振っていて、この多様な個性
の集合体がそれを認め、支えている。
何かで行き詰まっても、それを解決で
きる人物が必ず現れる。それぞれが持
つ持ち味を、そのまま活かして活躍し
ている。一人一人の個性をお互いに認
め合ってるっていうのは、こういうこ
となんだということを教えてもらいま
した。君たちはすごい！正直いって感
動しました。

初めて12年生を担当しました。だか
ら僕にとって初めての卒業生です。そ
れぞれが新しい一歩を踏み出す、その
瞬間に立ち会うことができ
て光栄です。これからどんな未来が続いてい
くのか、ととても楽しみです。同窓会、
呼んでください。自慢話を聞かせても
らいます。僕もその時たっ
ぱり自慢話ができるように、対抗心を燃やしてい
こうと思います。

さあ、気をつけて、いってらっし
ゃい！

卒業おめでとうござい
ます。

見島直子

2組担任 国語科

ご卒業おめでとうござい
ます。

皆さんとは実に長いお付き合いでし

た。やんちゃで可愛らしかった中等部
入学当時から、進路選択の葛藤に苦し
みながら大きく成長した高等部3年ま
での6年間は、振り返ってみればあつ
という間のように、しかしどこを切り
取ってもあふれんばかりの思い出で一
杯です。

皆さんの成長ぶりは時にまぶしく、
時にさみしく、また皆と共有した喜
び、怒り、悲しみ、笑いは数えきれま
せん。そしてその時間の中で、私は、
教師としてまた一人の人間として、自
らの未熟さを思い知らされ、また随分
と鍛えられもしました。今、こうして
皆を送り出すにあたって、あなたたち
一人ひとりの顔を思い浮かべ、また
様々な理由でこの学校を去っていった
生徒たちの顔を思い出して、感慨もひ
としおです。

皆さんは、これからそれぞれの進路
に向かって、それぞれ違った一歩を踏
み出します。「学校」という、良くも
悪くも皆を横並びに律してきた枠組み
はもう存在しません。前途に待ち受け
る広い世界に向かって力強く船出して
ください。皆さんに先んじて「社会」
という海を航海してきた先輩として、
まずは「ようこそ」。そしてあなたた
ちの担任としてささやかななむけの
言葉を贈るとすれば、

We live only once. だからどうぞ
勇気をもって。

人生は一度きり。 だからこそ慎重

(前ページの続き)

と思った、その時が、一番危険なよう
でもあります。だれもが陥りやすいの
は、自分と異なる考えや対立する考え
があったり、そのような人がいた時
に、自分の考えの方が正しく、善であ
り、相手は間違っていると判断しやす
いということです。エルサレムの聖地
を巡る争いなど見ていても、これが信
仰者同士の争いかと残念に思わざるを
得ません。

今日のように多くの民族や文化が交
錯する時代になりますと、考え方の異

なる人に出会うことも多くなります。
自分や自分たちの考えの方が正しい、
善であると即断しないで、異なる人た
ちの考えも謙虚に受け止めることが出
来るでしょうか。自分の判断が常に正
しいと信じているとすれば、自分自身
を絶対者、いわば神にしているような
ものです。そして、だれもが自分を絶
対者にしてしまいますと、世の中には
混乱と対立あるのみでしょう。サタン
が蛇に姿を変えて、人を誘惑している
ということは、そのようなことを指し
ているように思えるのです。

蛇の誘惑の話は、神話のこと、他人
事では済まされないことで、現代のよ
うな地球規模の社会に生きる人間こ
そ、肝に銘じなければならぬことで
はないでしょうか。

注：資料はカトリックとプロテスタントの
新共同訳聖書です。(*1)出エジプト記7:8-
12, (*2)民数記21:4-9, (*3)マタイによる
福音書10:16, (*4)創世記3:1-14,

(外務省子女教育相談室発行『子女教育
ニュース』二月号の巻頭言より)

に。

すでに錨は引き上げられ、帆は風をつかまえんとマストに高く揚がっています。しっかりね。いつかこの大海原をゆく一艘の小さな舟と舟として、皆さんに再会する日を楽しみにしています。

皆さんの前途に幸多きことを！

千里国際学園での月日を大切にかみしめながら、卒業式は笑顔でお別れしましょう。

卒業、本当におめでとう！

Peter Heimer

3組担任、英語科

Good-bye, seniors.

Have a nice life.

Study hard.

Be good boys and girls.

Eat your vegetables.

Push in your chairs.

And, remember, be kind to your fellow human beings; it will come back to you a thousand-fold.

廣田文野

4組担任、生活科学科

12年生の皆さん、卒業おめでとうございます。

私が担任になってから1年半、私にとっても充実した「濃い」期間でしたが、皆にとっても、進路を始めとして「分岐点」に立つことの多い悩み多き1年半でした。誰かと分かち合えない「悩み」、自分で乗り越えるしかない「問題」にも直面し、苦しみました。その苦しみが、これから皆さんが出会うさまざまな「苦悩」を乗り切る「力」になるはず。でも、頑張り屋で、そして頑張りすぎる皆さんにお願いがあります。どこかにも書いたメッセージですが、

1. 本当につらい時は「つらい」と言える人になってください。
2. 本当につらい時に「つらい」と言える誰かを見つけてください。
3. 誰かが「つらい」時には気がついてあげられる人になってください。

難しいお願いですか？ そうかもしれませぬ。わたしもまだ全部はできるわけではありません。きっと長い時間がかかるのです。健闘を祈ります！！

井嶋 悠

国語科

無心である人は、凄と思います。

若い人には、とりわけ難題かとは思いますが、瞬時でも無心になれる時間を創ってください。

きっと、思わぬものが見えて来ることと思います。

卒業、おめでとうございます。そして、新たな始まり、おめでとうございます。

6年前にご縁のあった、一人の教師より

松島 勇

国語科

皆さんとは授業で会うことが少なかったのが残念でしたが、それでも皆さんがこの学校で多種多様に活躍されていたことは記憶にあります。そして、何人かの人と色々な場で様々に仲良くなれたこともよかったと思っています。皆さんにぼくの好きな小説の一節を饅頭に贈ります。

「私は虚飾を行はなかつた。読者をだましはしなかつた。さらば読者よ、命あらばまた他日。元気で行かう。絶望するな。では、失敬。」(太宰治「津軽」)

中村鏡子

国語科

卒業おめでとう。

これからたくさんのごことに出会うことでしょう。

うれしいこと、かなしいこと、せつないこと・・・。

そのすべてを養分として自分の花を咲かせてください。

北尾友美

国語科

卒業おめでとうございます。希望や夢いっぱい今の気持ち、いつまでも新鮮であるように、歩みつけてください。

野島大輔

社会科

ご卒業おめでとうございます。

卒業生の先輩達から“千里で学んだことが世間では通用しない...” “温室

育ちとわかってショックの毎日...” という声をよく聞きますが、大丈夫！

「集団無責任の解決法」「自由について」「日本が多文化主義になるとしたら」「リーダシップとグループワーク」「ディスカッションの方法」「論文や発表の仕方」「KJ法と集団創造思考」「地球の上での先進国人の役割」「文化相対主義で考えるには」...ほら、少々のことがあっても乗り越える知恵を、どこかで学んだ気がするでしょ？

皆さんらしく、たくましく・たくましく！生きて行って下さい。本当におめでとう！

池田大介

社会科

戦後、抽象的な固まりの概念「国民」が定着！？

それとともに、「国民」の「(無作為の作為的政策を是とする!?) 国家」に対する“依存”は加速...

“安穩”としていていいのか！？

それ以前に...

「国家」という名の“怪物”を“飼ひ慣らす”覚悟はあるのか！？

“諸君が、諸君の国のために何を為し得るか、と問うのではなく、諸君が諸君の国のために何を為し得るのか、を問いたまえ(パクリ)!”

受け身となるべからず、“攻撃的に”生きよ!!

...卒業おめでとう...

馬場博史

数学科

神戸のポートタワーは、遠くから見ると美しい曲面に見えますが、近くで見ると何本かの直線の柱が斜めに立っています。同じ形のものとしては、家具の藤椅子や、学園の近くに建っている大きな給水塔(正確には「小野原配水池」)などがあります。この曲面は「一葉双曲面」といい、回転軸とねじれの位置にある線分が回転してできる面で、xyz空間での方程式は次のようになります。

$$\frac{x^2}{a^2} + \frac{y^2}{b^2} - \frac{z^2}{c^2} = 1$$



これ以上話が発展すると難しくなるのでやめますが、この形は美しいので、けっこう他でも見る機会があるかもしれません。その時はぜひこの話を思い出してみてください。ではお元気で。健康のために適度な運動を欠かさないようにね。

高橋寿弥

数学科

卒業おめでとう!!! ほんとと終わってみるとあっという間の6年間だったでしょう? 中1の時から比べて、皆外見も内面もすごく大人になったと改めて思います。4月からは、学生になる者、社会人になる者等色々だと思いますが、皆さんのこれからのご活躍を心より祈っています。また、母校に顔を見せに来て下さい。では、また...

石田純子

数学科

ご卒業おめでとうございます。楽しく、実りのある新生活であることをお祈りいたしております。

真砂和典

理科

いよいよ卒業ですね。中学1年の基礎理科の時は、まだまだかわいかった皆さんがもう巣立っていくのですね。化学1を選択した人は下級生をよく引っ張ってくれました。あの時にまとめてくれた化学史の課題は、今でも私より良いまとめ方の見本として下級生の役に立っています。生物1ではクラスメートになって机を並べた人もいます。科学の論理では「超常現象信じる派」が結構多いのに驚きました。農業キャンプで土にまみれて頑張る参加者の根性には感動しました。思い出し始めるときりが無いのですが、特にこの2年は授業選択で多くの人と話ができました。皆さんが迷い、悩むのにあまり力になれなかったのですが、それぞれが自分の学習や将来について深く考えたことは必ず報われると思います。

「真剣に考えて選んだ道はたとえ挫折しても後悔はしない。やれるだけのことをやっておけば、方向転換してもその足取りは軽くさわやかだ。」という私のモットーを贈る言葉にします。

井藤真由美

英語科

卒業生のみなさんおめでとう。短いお付き合いでしたが個性豊かなみんなとの出会いはとても楽しいものでした。ハードな受験英語中心の授業も、みんなのエネルギーと、陽気さと、創造性と、仲間を思いやる心のおかげで楽しくとりくめました。また、7年生の担任として7年生と同じ目線からみんなを見る機会も多かったのですが、その姿は、それぞれが自分の目標、生き方をきっちり持ちつつ(Respect for Self)お互いの個性を認め合う(Respect for Others)かっこいい仲間集団でした。SISを巣立ってからそのことに強い自信をもって大きくはばたいください。応援しています。

難波和彦

英語科

僕がこの学校へ来て初めて担任をもったのが、みなさんの学年でした。それまで高校生ばかり教えてきたので、みなさんのパワーには圧倒されました。その後そのパワーも衰えることなく、授業、クラブ、行事、生徒会活動などいろんな場面で、強烈な個性を発揮し、学園全体を活気づかせてくれました。卒業式もさぞかし感動的なものになるでしょう。出席できないのが残念です。さらなる活躍を祈ってます。

谷川依津江

英語科

ご卒業おめでとうございます。新しい世紀の幕開けとともに、次のステップへの幕開けとなりましたね。自分で納得のいく、そして満足できる道へと進んでいってください。Good luck!!

岡田憲志

保健体育科

卒業おめでとうございます。みなさんが学校からいなくなるのはさみしいかぎりですが、人はいつか別れて行くものですよね。いい出会いといい別れがあれば、いい人生だといえるかもしれません。また、いつかどこかでお会いしましょう!

中尾直子

保健体育科

卒業おめでとうございます。

SISで培った実力を外の世界で試すときがきました。自分を信じて進んで行ってください。

SIS/OIS保健体育科

サール、平井、加納、岡田、ピーキン、パーカー、エントウィッスル、中尾 授業、スポーツデイ、クラブ活動などに対して、みなさんが協力してくれたことに私達はとても感謝しています。卒業式が楽しい学生生活の最後の思い出になるように、また、みなさんの将来が素晴らしいものになることを願っています。

John Searle

OIS MS & HS principal

I would like to say to all the graduates a sincere thank you for all you have done for the school.

I have enjoyed so much working with you over the last 6 years. I will miss you.

Please go out in to the world and make a difference.

Woodrow Kramm

Multi Media Class, OIS Elementary

Dear Graduates,

My best wishes for you and your new future outside of Senri International School Foundation. I am sure you feel as proud as I do to have been a part of a school whose noble vision is to bridge cultures. You can all now make positive contributions to the world! Congratulations!

小野寺文江

事務局

皆さんご卒業おめでとうございます。

それぞれの夢に向かってどんどん進んでいってください。ご活躍を楽しみにしています。9月に10周年記念同窓会が行なわれるようですので、それへの参加にご協力よろしくお祈いします。学園へ時々遊びに来てくださいね!

環境作文で最優秀賞受賞

全国中学生高校生「かけがえのない地球を大切に」作文コンクール

高等部3年の小松麻美さんが、全国から多数応募のあった上記コンクールで最優秀賞10名のひとり選ばれ、副賞として10日間の「スウェーデン/スイス視察旅行」が贈られました。おめでとうございます。



<喜びの声>

これから、環境問題を本格的に勉強していきたいと考えています。今まで、私に実感として迫ってきたさまざまな環境問題について、多くの人に聞いて欲しいと思っていました。

また作文中で述べたホームステイも修学旅行も、残念ながら環境学習が目的ではありませんでした。是非、「環境について学ぶ・知る」という目的で環境問題への取り組みが進む北欧へ行ってみたいという思いから、今回WWFの作文コンクールに応募しました。その作文が入賞して大変嬉しいです。

応募にあたり国語科の木村先生に、作文を何度も見ていただきました。大変感謝しています。ありがとうございました。

<受賞作文>

実感した環境問題 - 私が環境学を学ぶ理由 -

高校一年の夏休み、ドイツのハンブルグへヶ月間ホームステイした。ドイツの社会の仕組みは明らかに環境に配慮したものだった。買い物に行くと、野菜も肉類もパック詰めではない。日用品も必要以上の包装はされていない。電車やバスの交通網が充実しているのでマイカー規制に役立っている。街には自動販売機もコンビニもほとんど見あたらない。すべてが組み合わさって全体として環境に負担をかけないのだ。ドイツ人全てが環境問題に

高い関心があるわけではないが、人々はそうした社会にそれほど不満を抱いてはいない。緑の党の成立など、社会システムを環境に配慮したものに变えていったのは、国民自身だということを考えれば当然かも知れない。

帰国後、今の自分に何ができるだろうかと考えた。まずは自分の生活を見直そう。一人一人が節節水を心がけ、リサイクルに協力することは大切なことだ。積み積み積もって大きな力になるだろう。しかし、それはあくまでも第一段階だ。ドイツへ行って“どれだけ多くの人々がやるか”が“どれだけ大きな力になるか”だと考えるようになった。日本には、環境問題を身近な問題としてとらえられない人が多い。一番身近なはずのごみ問題、人々は自分のごみを目の前から自分の見えない所に移動させ、自分の出したごみにさえ無関心になる。ならば、このごみ問題を通して私達の世代に働きかけ環境に興味を持つ人の輪を広げようではないか。そのような考えから、環境問題をテーマとしたクラブをはじめた。

主に学園祭でエコトレーや建築端材の割り箸を使用しようという取り組みをしてきた。使用済みトレーを洗浄して業者に送り返すと、新しい原料を加え半永久的に使うことができる。回収した使用済み割り箸は王子製紙へリサイクルのために送った。一年目は各クラスをまわり有志を募って行った。二年目はその活動が認められ生徒会の協力の下、義務化され、大規模に行うことができた。

今年二月、修学旅行でタイ・バンコクのスラム街でボランティア活動を行っているプラティープ財団を訪ねた。そこで聞いた「先進国の企業等による森林伐採で気候の変化が起こり農作物が不作だと、農業で生計をたてる

家の生活は厳しくなる。そうした人が職を求め都市部へ流入することもスラム形成の一要因になっている。」という話は衝撃的だった。私達の豊かな暮らしは、開発途上国の人々や自然の犠牲の上に成り立っているのだ。

環境先進国ドイツで市民やNGOの果たす役割の大きさを知り、タイでは国際問題としての環境問題を感じ、改めて環境問題の多様性を実感した。クラブ活動では実際に活動することの難しさを思い知らされたのと同時に、人の輪が広がることの嬉しさや楽しさも知った。文献からだけでは得られないこれらの実体験から私は進路を決めた。今後、人間活動や人間社会に焦点をあてて環境を考える環境社会学を専門的に学びたいと考えている。

帰国に向けての心の準備

栗原真弓
カウンセラー

海外にお住まいになったことがあるご家庭にはなじみの深い月刊誌「月刊海外子女教育（財団法人海外子女教育振興財団発行）」に本校カウンセラー栗原真弓先生がこれまで何回も執筆を依頼されています。今回から、栗原先生及び財団のご了解を得、インターカルチャーに転載をさせていただくことにしました。これまでのご執筆も全てそうでしたが、その内容は、本校の関係者皆さんに是非とも読んでいただきたい、本校の教育の根幹に密接に関わる深いものです。どうぞ一読下さい。

（SIS校長 大迫弘和）

異文化間トレランスという概念が、最近取り上げられるようになりました。トレランス (tolerance) とは、原裕視氏によると、「(個人が心理的に) 耐えることのできる力」「受け入れ、認めることができること」「共生的関わりを持てること」など幅広く想定してあります。このトレランスこそ、異文化適応および自文化復帰に際して必要な能力であり、これからのボーダレス社会に向けても大切な資質になるでしょう。

また歳月とともに、帰国生のあり方、見られ方も変わってきました。1990年代に入り、帰国生の特質が薄れ、海外でも日本とそう変わらない生活をする「内向きの海外生」といった表現も耳にするようになった一方で、長期滞在者や現地で生まれた帰国生も増えています。彼らへの理解と援助も忘れてはならないと思います。

そこで今回は、海外に長期滞在していた帰国生の事例から、こうした能力や資質を培うために、「自己肯定 (self-esteem)」がいかに大切かについて見ていきたいと思えます。

Q 高校一年生になる息子は、生まれてからずっとドイツで暮らしてきました。親の滞在年数はそれよりも長く二十年近くになるので、私自身も帰国に対して不安な気持ちがあります。息子は日本語力も不十分です。はたして日本の高校でやっていけるのだろうか、とても心配です。

A これからの日本での生活を思うと、親子ともども不安でいっぱいでしょう。特にお子さんにとって、日本は未知の国です。ですからまずは編入学する学校側にお子さんの事情を理解してもらうために、お子さんのこれまでの歩みや現地校の先生がたからのコメントなどを要約した資料を用意しておき、帰国後にそれらを転入先の学校関係者に提出なさることをお勧めします。

実際に日本での生活が始まると、習

慣はもちろん気候や生活のリズムなど、思いがけない面で違いを意識することになります。日本語力が十分でない場合はなおさら、友達との話題にもついていけなかつたりして、居心地の悪さを感じることもあるでしょう。また学業面での苦勞も大きいでしょうし、履修済みの内容でも、日本語力が伴わないために歯がゆさを感じたり、逆にもの足りなさを抱くこともあるかもしれません。自分を発揮できないことで、存在感を見出せず、自信を失ったり、気力が失せることもあります。

このような場合には、異文化間カウンセリングの視点から対応することが大切になってきます。

まず子どものものの見方・考え方に耳を傾け、彼らの基準から来る正当性を認めましょう。そのうえでお子さんが慣れ親しんだ現地の文化と日本の文化は違うことを伝え、その違いによって生じる混乱や葛藤は自然な反応だと肯定してあげることが、何よりも支えになります。そして人が不慣れな文化に移り住んだときには、「接触」「葛藤」「危機」「適応」といったいくつかの段階を経て心の調整がなされていくことを、子どもがわかるように説明してあげてください。先が見えるということは、絶望的な状況に置かれた人間にはひと筋の光となります。

また子どもたちの内面において、自文化と異文化の関係は、大きく次のような変容を遂げます。

同化... 現地の言語が第一言語となり、現地の文化が自文化として内在化している状態。

離脱... 異文化に接触したばかりで、まだ自文化に依存しているか、適応できずに自文化が優位にあり、対人関係も限定的な状態。

統合... 二つの文化を個人の中でうまく調整し、自文化の良さと欠点、異文化の良さと欠点を把握している状態。

まず帰国後も「同化」の状態が続

き、次第に日本における生活になじめず「離脱」が起こります。深刻なのは、その過程で心に生ずる最初の「危機」です。帰国後しばらくたっていたりすると、周囲に見逃されやすく、適切な援助を受けられないことが多いのですが、異文化間カウンセリングのもっとも必要なときはまさにこの時期で、帰国後三カ月から半年ごろでしょう。

最近、いまはもう二十代半ばになった帰国生からEメールが届きました。

「十年前帰国した当時、この国の何もかも（食べ物以外）が嫌だった頃を思い出します。しかし、その時の体験を後悔なく、貴重な思い出として受けとめられている、『今』の私があります。

日本という国は多くの帰国生が言うように、ごみごみしていて、ゆとりに欠けている部分もあるのかもしれませんが。でも他国にはない、すばらしいところもたくさんあるとも思います。今はそれがなかなか見えない人も多いかもしれませんが、これから先、是非それを感じとっていつてもらいたいと願っています」

彼は以前、こんなことも語っていました。

「中学三年生で帰国したとき、英語の方が流暢に話せた僕を小さな国際人として人は見ていました。でも、僕自身の気持ちの中では国際人でも何でもなく、どちらの文化・習慣や言語にも十分ではない中途半端な人間であると痛感していて、内心とても不安でした。しかし、歳月が経ち、自分にとって日本が母国であり、自分は日本人であるという自覚が持てるようになりました。同時に、自分は日本人であるけれど、アメリカの文化や言語にもある程度精通した人間であり、それこそが自分の個性であると認識したとき、初めて自分が国際人と呼ばれても不自然ではないと思うことができました」

どんな説明も、この体験者のことば

に優るものはないと思います。まさにこれは、文化的にも人格的にも「統合」がなされた状態といえるでしょう。私たちは帰国生を、戻ってきたそのときから、ふたつの文化と言語を理解する貴重な担い手として見がちですが、その後の長く孤独な苦悩の経過をたどって初めて、真の国際人としてのトータルな人間が誕生するのではないのでしょうか。

異なる国に移り住むということは、言語や習慣に不慣れなだけでなく、価値観の違いをも認識させられ、対人関係のあり方などにも影響を与えます。つまり自分の内に持っている行動や思考の基準が、異文化に置かれることで脅かされ、変容を迫られるため、自己のアイデンティティが揺らぎはじめるのです。この揺れをある程度でとどめ、うまく調整できるかどうかは、いかに健全な自己肯定が備わっているにかかっています。特に思春期から青年期にかけての時期には、それまで出会ってきたもの、体験してきたものを自分の中に肯定的に受け入れることができているかということが大切となってきます。

真の“自己肯定”がなされていれば、その自己は「自分ひとりで存在する自己」ではなく、「他者とのかかわりの中で生きている自己」であることに気づくはずですが、これは、冒頭で述べた異文化間トレランスの資質とも言い換えることができます。自分を受け入れ、その価値を認め、大切にしている子どもは、自己表現しながらも、違った価値観や行動様式を持つ対象への配慮と寛容さを示すことができるのです。自己の確立や肯定ができていれば、異文化接触によるショックからの立ち直りも上手にでき、その体験をより良く自分の人生に生かしていけるのです。

帰国を前にして、私たちは言語や学校での学習、あるいは進路などへの配慮にもっとも目が向き、それらへの対

策に多くの時間と準備を費やします。しかし、何よりも大切なのは、お子さんの内面で健全な自己肯定が育っているかということではないでしょうか。それがあれば、どんなにたいへんな状況に直面しても自分を見失うことなく、異文化へのトレランスを發揮していくでしょう。たとえ時間はかかっても。

（月刊「海外子女教育」2001年1月号より）

< 留学報告 > 予定より短かった留学

ソーヤー・イアン
 中等部3年

僕は、去年の8月の末から今年の1月19日までアメリカで留学しました。最初は、一年間行ってきますと言っていましたが、結局は半年で帰ってきました。そのせいで「なんで、帰ってきたん？」とよく聞かれました。その理由はいろいろあります。

まずは、最初にくいと決断した時の理由から書きます。僕は将来アメリカの大学に行きたいので僕の英語で通用するのか、と言うのを確かめたかったのです。結果は、自分では行けるって感じですね。はっきり、言って差はあんまり感じられませんでした。むしろなかったと言っても過言ではなからう。あっちに、まだいても英語が特に伸びるわけでもなく他の教科はどんどん遅れていくので帰ってくることにしました、っと言うのが単純な理由ですね。他には、精神的なストレスが多くなかなかきついことがありました。やっぱり、家族から離れることはなかなかきついんですね。将来、大学に行くときたぶん親から離れることになるんですけど、そんなときはしょうがなく、今はまだ3年間一緒に過ごすことができるのでわざわざ少なくすることはないだろう、っと思ひまして。まー、そんな理由で帰ってきました半年で。

僕は、親戚の家に泊まらしてもらってました。そこは、学校から20分ぐらいはなれた家でした。なかなかbigな家でした。しかし、僕は高級住宅に住んでたらしく、他の家もでかく立派でした。だから、ぼくの行った学校もお金持ちの学生さんが多かったです。まー、でもお金持ちと言ってもupper-middle classの人たちでした。そして、学校は、いつもどうりチャリ通でした。そのの、学校はとでもでかく1000人はいたってかんじます。最初は、なかなか友達ができず、つらい日々をおくってました。やはり、自分から積極的に友達をつくらうとしないとだめですね。ぼく的には、あっちから話してきて欲しいなーって感じてはいたけど、さすがにでかいっ学校ではそういうわけにはいきませんでした。自分からしゃべり、自分からどんどん友達作りががんばらないとだめでした。でも、やっぱりどこに行ってもそうだと思いますけど、最初から混じろうとするのは、無理だと思います。そういうこともできる人はいると思いますが、少しずつ自分をみんなに売り込んで友達をつくるものではないでしょうか。

留学してきた半年間で、僕はかなり成長したと自分で思い込んでます。家族から離れ、自分でいろいろな決断をし、自分に頼って半年を過ごしてきた。そんなんやから、成長はするでしょうと思ってます。どんな風に成長したと聞かれてもなかなか表現できませんけど絶対しました。そして、留学に興味ある人は誰か留学経験者からどんなんかかって聞いてから行った方がいいと思います。僕なんか、どんなんかのかって勝手に想像しかしてなかったのそこで苦労したこともありまして。っで、余談ですが帰ってきてみんなのできるものないかなーとおもひまして、その答えにfrisbee部を作ろうとおもひました。だから、興味ある人は僕に声をかけてください。frisbee部進行中ですから。あと、質問等ありましたら僕のe-mailに送ってください(lawyerian@hotmail.com) もちろん直できいてもいいですし。それじゃあみなさん、残りの学校生活を楽しんでいきましょう。

< 転校生短信 >

SISが一番！

左海知里
 英国在住、9年生

みんな元気してる？。イギリスに来てからあつという間に1年経って、あと数ヶ月もしたらもう2年。SISが懐かしいです。SISってほんとにいい学校だよ。去年の秋一時帰国してあらためてそう思った。イギリスはすっごい好きだけど、学校はやっぱりSISが一番！。みんながめっちゃうらやましいよ。今の学校では図書館はないし、コンピュータ室はあるのに授業意外では使えない。実験器具もそろってないし、なんと更衣室というものさえない。しかも授業は5時まで、クラブはないし、ランチもまずい。数えだしたらきりがなくらい不満がいっぱいです。

それでもやっぱりイギリスでの生活は好き。なんといつても自然がいっぱいあるのはいい！。Londonをはじめ飛行機の中から見たとき、緑がいっぱいで、もうそれだけでイギリスが好きになってたよ。反対に一時帰国したときに空から見た大阪は息が詰まりそうな光景。その違いにはほんとびっくりしちゃう。イギリス人は日本人と比べていいかげんなところもあるけど、最後の人が出終わるまでドアをきちんと持っているとかいうようなイギリス流のマナーはすっごいあって思う。日本では他人のことは気にしないって感じじゃない？。海外での生活をしてみて、日本のいいところ悪いところがはっきりわかるようになったっていうのも、こっちで生活できてよかったなって思える理由の一つ。「日本」っていう国を客観的に見たりして、初めて「日本」がわかった気がする。

SISでみんなと一緒にスクールライフおくれなのは残念だけど、イギリスに住むことができよかったなあって思うよ。それではこの辺で。時々メールちょうだいね。

petite_suzuran@hotmail.com

【カーディフ通信】 生徒の気持ちがよくわかります

難波和彦

英語科

昨年末に比べると、イギリスの天候はましになってきました。時々底が抜けたような大雨が降ることがありますが、比較をすると晴れの日がふえてきました。晴れた日は公園で日向ぼっこをする人が見られるようになりました。いきなり半そでのTシャツになっている人もいて、人によって温度の感じ方がちがうのがわかります。教室でもイギリスより南のほうからきた人は寒がりだし、イギリスより北からきた人は、暑がり、競って窓をあけたりしめたりして温度調節をしています。イギリスから見ると、日本は四季の区別がはっきりしているなど感じます。

カーディフでは、大きなイベントが次々に開かれています。ミレニアムスタジアムという大きな球場が昨年ラグビーのワールドカップに合わせて造られたのですが、ここでイギリスのサッカー界最大のイベントであるFAカップファイナル(日本の天皇杯のようなもの)が開催される予定があったり、大きなコンサートがあったりします。2月といえばバレンタインデーがありました。SISでも生徒会が花を売ったりしていますが、イギリスでは日本のように女性が男性にチョコレートをあげると決まっているわけではなく、男性女性関係なく、大事な人にカードや花を贈るのが習慣です。チョコレート売り場は、特設されていませんでしたが、花束が最も人気があるようでした。

さて、僕の大学院のお勉強のほうですが、1月の中旬に、3つの課題(それぞれ2000語ずつ)の提出日があり、冬休みといってもこれにかかりっきりでした。久しぶりに徹夜勉強をしてしまいました。夜中に勉強していると突然鼻血がでてきたり、目が充血してしばらくもとにもどらなくなったりして、大変でした。苦勞の甲斐があって、1学期の成績は初めに予想もなかったようないい成績をもらえたので、びっくりしながらも喜んでます。ふだ

んは、成績をつけるほうなので、成績をもらう生徒の気持ちがよくわかりました。

少しだけ、どんなことを勉強しているのかをお話しましょう。descriptiveとprescriptiveという言葉があります。prescriptiveというのは、'こうすべきだ'というモデルがあって、それに従うということで、descriptiveは'こうなっている'というあるがままの状態を描写するということです。文法を僕らが教える時は、prescriptiveつまり、このような文法をつかうべきだというモデルがあって、それを教えるわけですが、今はdescriptiveな文法を学んでいます。実際に人々がどう話しているか、どんな文法を使っているのかを観察して、なぜそうなるかを研究していくというものです。人々が実際に話したり、書いたりした何億という英語のデータが、よその大学のコンピューターに記録されていて、それをインターネットで検索して、単語や文法が実際にどう使われているかをリサーチしていくコーパス言語学というものを1学期は勉強しました。英語の文法について調べる時に、文法の本を見てみたり、ネイティブの人に聞いてみて確かめることをよくしますが、このコーパスを使った調べ方はまた別の角度から英語を見ることができるので、なかなかおもしろいです。

発音についても、一昔前なら、RP (received Pronunciation) というイギリス英語のモデルがあって、RPを話すことが英語の発音を勉強するときの目的でしたが、今は、ありのままの訛りのある発音が、受け入れられています。たとえばBBCのアナウンサーですら、訛りのある英語を話しています。実際英語は第1言語として話す人よりも、第2言語、外国語として話す人の方が数が多いので、「イギリス人っぽいからいい」とか「アメリカ人っぽいからいい」といった発音に対する見方は、もう古く

なりつつあります。国際語として、どんな発音がわかりやすいのかということを考えていくことが必要だということです。

今のクラスはひとりが脱落して、僕以外の生徒はみんなギリシャ人という状態になりました。彼らは教室の中に他の人がいても、ギリシャ語で話しているの、ちょっとそういうときは、中に入っていくのが難しいです。もちろん僕としゃべるときは、英語ですが...。日本にいる時は、逆の立場で、僕自身、日本語のわからない人が同じ空間にいる時に、その人のことを気遣わずに、日本語でしゃべっていることもあると思うので、「外国人」としての気持ちも味わえるので、これもいい経験になります。イギリスでのふだんの生活では、あまり日本で外国の人が受けるあつかい-じろじろ見られたり-というようなことがないので、ごく自然に暮らしています。僕の近況はこんなところです。時々みなさんがくれるメールのお便りが励みになります。またみなさんの近況をメールでも教えてください。

namba@ma.kew.net

難波先生は、英国の大学院留学のため1年間休職。2001年9月に復帰の予定です。

<旧職員寄稿> 脳を触れた！

田浦秀幸

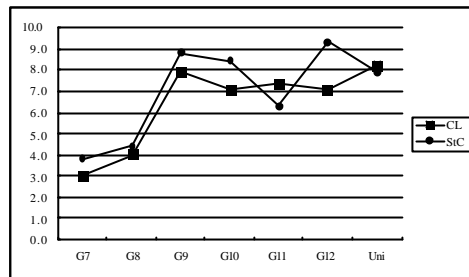
福井医科大学教授、IESIS 英語科職員

医科大学に勤務していると、患者さんの病気（インフルエンザなどの重病でないもの）が学生を媒体としてうつることがたまにある一方で、自分の体調がすぐれない時に臨床の先生にすぐ尋ねられるという良いこともあります。私の研究分野はバイリンガリズムですが、言語的な面だけでなく、脳構造にも関心を持っています。最近ではfMRIを使って脳のどの部分が活動しているのか、モニター上で色鮮やかにリアルタイムで見ることができの、ご存じの方も多いと思います。少しその関係の本を読んでみましたが、生化学や医学の知識が皆無ではなかなか敷居の高いものだと感じていました。解剖学の先生にその話をすると、ホルマリン漬けの人間の脳を見るだけでなく、実際に触らせてもらいました。頭蓋骨にどのように脳が入っていて、脳の各部分がどのようにできているのか、まさに百聞は一見に如かずでした。解剖して見るとその人が生前よく頭を使っていたかどうかかわるそうです。脳がやせて溝が深いとあまり使っていなかった証拠で、私が触らせてもらった脳はみっちり詰まっています。「頭のいい脳」だということでした。実際に見て触ることで写真ではわからなかったことが理解しやすくなりましたが、いくら外から見たところで脳の機能は一切わからず、やはりfMRIのような大がかりな機器を用いないとだめなようです。その分野の先生と話したところ、一度自分自身を被験者として英語と日本語を使う時に、脳の違う部位が活動しているのかどうか簡易版fMRI (optical topography) を使ってみれば、と言われました。これも今の職場で働く利点の1つですね。

SIS Research Column <9>

一般生徒の英語力調査<3>

2回に渡り千里国際学園の一般生徒の6年間に渡る英語ライティング力の

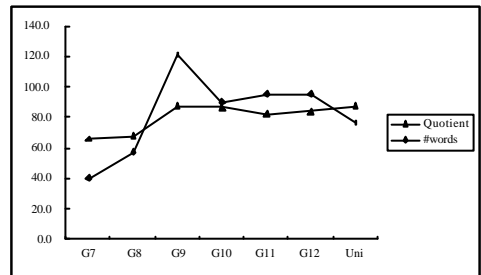


推を見てきました。今回は英語力が比較的高いと考えられる外国語学部の大学生（1・2年生）のライティング力と比べて見ることにします。

物語を書く上での文法力(CL)と物語構成力(StC)は、両方とも9年生で一気に伸びる傾向が見て取れます。以前お知らせした通り、このライティングテストが実施された当時(1997-8)、一般生対象のS英語は9年生でかなりの分量の英語を書くトレーニングを課していました。これが9年生での伸びに繋がったと考えられます。物語構成力に関して、11年生で一度下がってから12年生で再び向上します。外大生は12年生よりも下がっているようですが、統計処理上9、10、12年生と同じレベルです。このTOWL-3テストでは8点以上がネイティブの平均値と設定されていますから(ちなみにOISやオーストラリアの高校生は平均11点弱でした)、千里の生徒は9年生でほぼネイティブと同等の物語構成力を身につけていると言えます。但し、11年生で統計的得点低下を示している点に関しては、この学年がたまたまライティング力に必要な文法力に弱点を持つ学年であった可能性を以前示唆しましたが、外大生の結果より、より一層その可能性が高まったと言えます。最終判断は当時の11年生が12年生になったときのライティングを分析するか、全く別の年度に11年生だけ取り出し調査してみなければわかりません。

一方、文法力に関して唯一ネイティ

ブの域に達しているのが外大生です。これより、聞き話し、読み書く総合力はかなりのレベルに達している千里の生徒も、文法訳読中心に頑張ってきた外大生には文法力で若干劣ると言えないでもありません。但し、有意差はないので、ネイティブの域に若干足りないレベルまでは中3で達していることに間違いはありません。千里の英語教育の素晴らしさが際立つデータ結果が多い中、このように一般の学校で一生懸命英語を勉強している学生の文法力もしっかり付いているだとう事実を忘れずに、千里の生徒も教員の方々も一層頑張ってください。



次に総語数(# words)とライティング総合力を見てみます。文法力や物語構成力同様、総語数も9年生で急激に力が伸びています。その後(10年生で)統計処理上数値が落ちるのも第2言語習得理論に合致しているように思えます(Ellis, 1994には第2言語上級者になる直前に冗長な表現をよく用いるとあります)。外大生はグラフでは10・12年生よりも低く見えますが、有意差はなく千里の高校生と同じレベルです。つまり、総語数に関して中学3年生で外大生レベルに達していると言えます。但し、OISやオーストラリアの11年生の平均をとると約200語であったので、冗長でない面白い物語を15分間でネイティブ並の語数を用いて書くにはまだまだ根気がいるようです。

ライティング総合力(Quotient)に関

しては、9年生でネイティブのレベル(80点以上)に到達した後その力をキープしています。外大生は千里の9年生以降の学年と同じレベルです。OISやオーストラリアの高校生が110点ですから、千里の生徒はかなり近い得点を中3からあげ、すでにその時点で外大生に匹敵する力を付けているようです。

こうしてライティング力を見ると、千里の生徒は物語構成力やライティング総合力を中学3年生でかなり身に付けていて、それは外大生や同学年のネイティブにほとんど匹敵するものであることがわかりました。その一方で、統計的有意さが全くなかったので今回省略した英語のpunctuationや、短時間に沢山英語を書く力は千里を卒業して大学生になっても根気よく努力を続けられないとなかなかネイティブのレベルまで到達できないこともわかりました。また今回の外大生のライティング力分析を通して、日本の高等学校でしっかりと英語学習をしていればネイティブに匹敵するほどの文法力が付くこともわかりました。

Bilingualism Column <9>

2言語全く同じレベルのバイリンガルになれるの?

ごく僅かな例外を除いて、答えは"No"です。バイリンガルの子供を持つ保護者が抱く理想的ではあっても非現実的な夢とは、子供が両言語ともモノリンガルの能力を身につけることです。バイリンガルにとって、各言語には使用目的があって、機能が異なっているのです。例えば学校や職場で英語を使っているバイリンガルが、家庭や教会では別の言語を用いることがあります。ですから学校や職場で使う言語の方が語彙力が多く、表現力も豊かになる一方で、家族や親類の間でしか用いない方の言語はその目的が十分に満たせる程以上には発達しないかもしれません。ただし、どちらの言語の方が優勢であるかは一定しているわけではなく、環境によって変わります。2言語理解できて1言語しか発話できない子供が、弱い方の言語を使う環境に入ると急速にその言語を話し書けるようになります。つまり、バイリンガル

の子供が将来どのような言語使用をするかに関して唯一確実に言えるのは、だれにもわからないということです。

one parent-one language法(両親の母語が異なり、それぞれの母語を子供に対して用いることで、子供に2言語を身につけさせる方法)で育った子供でさえも、兄弟姉妹間の会話使用言語や学校・職場で使う言葉の影響で、2言語間の優劣が常に変化します。保護者にとって大事な事は、モノリンガルの子供と比較するのではなくバイリンガルの子供と比較することです。バイリンガルの中にはモノリンガルが2人いるのではなく、2言語が一部分分離していながら共有部分も沢山あるとてもユニークな言語頭脳の持ち主であることを忘れないようにしないといけません。科学に関する単語は1言語に偏っていたり、宗教用語は別の言語でしか知らないなど、モノリンガルと同じ語彙力がないかもしれませんが、概念は両言語で共有されています。このことは、日本語で足し算や引き算を学習すると、同じことを英語で学習し直さなくてもいいことからわかります。

バイリンガルはA語母語話者とB語母語話者が一人の人間の中に存在しているのではなく、「バイリンガリズム」という言語を母語とする人なのです。バイリンガルの子供を持つ保護者は、モノリンガルと比較したり2言語間のバランスの悪さに気を取られることなく、2言語・2文化間を自由に行き来できる柔軟性に目を向けるべきです。2言語間のアンバランスは今おかれている言語環境によるものですが、学校での学習や就職に際して有利に働くことがあれば、不利に働くこともあるのもまた現実のようです。

原典: Colin Baker, 2000. "A parents' and teachers' guide to bilingualism" pp. 32-34.

Book Review on Bilingualism <7>

山本雅代著「日本のバイリンガル教育」(2000) 明石書店

この本も前回に引き続き社会言語的な面からバイリンガルを見たものですが、日本の事象のみを取り扱っていますが、バイリンガルと言うと、どうも日

本人は英語と日本語の2言語併用者を頭に思い浮かべますが、数から見ると日本に一番多いバイリンガル(純粋に言語面から見るとモノリンガルかもしれませんがバイカルチュラルという意味で)は在日の韓国・朝鮮の人たちです。それ以外にも、政府の抑圧の為に殆ど自由に自分たちの言葉を操れる人たちがいなくなってしまったアイヌの人たちや、外国人労働者(ニューカマー)の子供達、中国からの引き上げの子供達、インドシナ難民の子供達、帰国児童・生徒、また沖縄にはアメリカンと呼ばれる米軍人とアジア人との間に生まれた子供達があります。このように、帰国生以外にも沢山のバイリンガルが日本には生活しています。但しあまり社会一般では知られていませんね。このような人たちと日々接していたりしてよく実状を認識している5人が、それぞれの章を担当しているので説得力があり、全体を総括した章もあるので、手っ取り早く日本社会のバイリンガル教育の現状を掴むには実にコンパクトにまとまっている本だと思います。それぞれ様々な問題を抱えながらもどのように対処しているのか、将来的にはどのような施策をすればいいのかの提案もあり、バイリンガル教育では先輩格のアメリカでの捉え方も綴られ、日本の言語政策を決定していくような立場の人たちに是非読んでもらいたいような本です。アメリカでのバイリンガル教育の変遷を参考にしたり、どんどん増えてきつつある母語が日本語でない人たちに対する日本の公教育の現状を直視することから、日本で導入間近の小学校での英語教育のあり方に対しても方向性が見えてくるような気がします。千里国際に在籍中のみなさんやその保護者の方々是一般の方よりも言語について関心が高いと思いますので、この本に書かれているような知識は是非仕入れておいて損はないと思います。

このコラムに関するご意見・ご質問等は直接e-mailでお寄せ下さい(htaura@fmsrsa.fukui-med.ac.jp)。

■ 学年だより

中等部 1 年生

愛されている自分

斉藤 数

3組担任 理科

この冬学期は、途中で冬休みが入ったり、入学試験が入ったりしたせいかとても短く感じられます。去年の今ごろは本校への合格も決まり、入学を間近に控えて学園で学べることに心はずませていたことでしょう。あれから1年が過ぎようとしています。6分の1の期間ではありますが、もっとも大切なスタートの1年間です。良いスタートは切れましたか。

本校で最も大切にしていること、すべての生徒に頭でなく体で覚えてほしいこと、それは、「5つのリスペクト」です。たとえば、「環境を大切に」では、教室の清掃はサボらずに責任を果たせましたか。廊下にごみが落ちていればあたりまえのように拾うことができましたか。「リーダーシップを大切に」では、授業やホーム・ルームの時間など先生が入室されたら私語を止めてお話を聞ける体制に入っていますか。「学ぶということを大切に」では、授業に集中できていますか、友達に授業以外のことで話かけたりしていませんか。リスペクトの第1と第2である、「自分を大切に」「他人を大切に」では、そのように行動できているか、時々振り返ってみましたか。

冬学期のロング・ホームルームの時間は、人種差別やいじめについて話し合ったり、ビデオを見たり栗原先生からお話をしてもらったりしました。もう配られた本は読み始めましたか。ビデオの感想文集なども目を通すことができましたか。文集の中にはたくさんの大切な言葉があり、意見や決意がありましたね……。

「かわいそうだなあと思うより、それを止めてあげられるほうになりたい」「差別を止める勇氣は、あまり持っていないかもしれないけど、せめて差別をしてはいけないと思える人になりたいで

す」「今日このビデオを見ていじめとか差別は、体験した人しかわからないし、想像のつかないほどのものであることがわかりました」「誰だって欠点はあるし、自分ではできてもAさんは出来ない。でも逆に自分ではできないことでもAさんは出来るとか、みんなプラスマイナスゼロだから。世界中から差別が消えてほしいです」「イジメている人はイジメられているほうのことは、何も考えていないと思う」「人種差別やいじめにあった人がどれだけ、傷ついてつらいかということです。でも、わたしたちは、かわいそー、あの子が一番つらいんだよね、分かってあげないと。といったことを口にしても、実際その立場に立たないと分からないということです。」「自分がいじめられる苦しみを知っていても、逆の立場になると、自分も、そのにくんでいたいじめる人になってしまうのだ……。とてもおそろしいコトだと思う」「差別されている人の味方をする人がいない、というのはだめだ、と思いました。でも、私がそういう立場だったら、とまどうと思います。それは、差別されている人の味方をする、自分も差別されるかもしれないと思うからです。だからといって、見過ごすと後で、後悔すると思うし、自分が情けなくなると思います。だから、自分より、そのとき苦しんでいる人の味方をするのが先だと思いました」「僕も差別が起こっていたら、積極的に止めにはいりたいです」……などなど。

私達は、差別やいじめを見たとき止めるべきだと思ってもなかなか行動に現すことは難しいものです。しかし、周りの人が自分と同じように思っていることを知っていれば、勇氣を出して行動に移すことができると出来るでしょう。

先日栗原先生は、この感想文を元にお話してくださいました。……「気づいている自分があるのに、それを表現していないのは、自分を大切にしていないことになるのです」「傍観者でなく、勇氣を出して言える人になってほしい」と。そして「みなさんの中で言えると思う人」と生徒に聞かれたとき、半分

上の人の手が上がりました。栗原先生は更に続けられました。「私達の行動を作る・もと・になるものは感情であって、その感情は、3つの要素 怒り・不安そして愛 が基本となっています。一人一人が安定した優しい感情が持てるよう、「自分を大切に」し「他人を大切に」した行動が取れるよう、一人一人がたくさんの愛をもらい、愛されている自分に大きな自信を持ってください」……。 (栗原先生、忙しい時間の中で、このような貴重なお話を1年生に聞かせてくださり、ありがとうございました。)

この4月からの新2年生全員の顔が愛されている自分に自信のある輝きを放ってほしいものです。

中等部 2 年生

難しい時期を上手に乗り越えよう

野島大輔

1組担任 社会科

春も近づき、皆様方におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。

8年生で取り組んできた、例の「学校で働く大切な人々」のワークには、他の学年からも注目がありません。インタビューでまとめたものを展示にして、もっと大勢の生徒に、私たちの校内の生活がいかに大勢の人々に支えられているか、考えてもらうための作業にずっと取り組んできております。インタビューを通じて、生徒たちからは、「こんなにお世話になっている人々がたくさん居るとは思わなかった」「朝早くから、私たちのためにこんなに大変な仕事をしておられると初めて知った」「こわいと思っていたおじさんが、とても親切で優しく……等の意見が出されています。一方、校内各方面の職員等の方々からは、「元気が良くいつも挨拶してくれて、気持ちが良い生徒ばかり」「校舎を

もっと大事に使ってほしい」「とても恵まれた学校なので、『自由』にありがたさを感じて下さい」などのお言葉をいただきました。学校社会に対する理解がまたひとつ広がったように思います。とても親切に対応して下さいました。職員、カフェテリア、清掃、スクールバス運転手、などの方々、改めて心よりご協力に感謝を申し上げます。

8年生の近況ですが、今も、基本的には「学校が楽しい」という声が多く、総じて「元気で明るい」「テキパキ自主的に動くので授業を進めやすい」ということを、教科担当の先生方から聞きます。反面、少々学校の環境に「慣れすぎた」「決意したことを忘れてきた」のではないかと思われることも見られてきました。集団に溶け込み過ぎて個人の意識が弱くなり流されてしまっている、情報に対する注意力が欠けてきた、授業態度に真剣さが不足することがある、などの指摘を受けることがありました。

また、学年のLHRで聞いたところ、「人間関係」についてのストレスを感じる、と多くの生徒が手を挙げました。SISでは、一般生徒、日本人学校からの帰国生徒、現地校からの帰国生徒、国内の外国人学校、等の出身者を、授業やHRクラス、クラブ活動など色々な機会を通じて、文化の違いを乗り越えて友情を作り上げる喜びも、文化の違いから来る摩擦も、身体で体験をしながら学んでいく、という方針を採っています。

一言で「友達」といっても、これほど文化の違いのある事柄はありません。顔見知りなら誰かれかまわずフレンドリーに接する文化、特定の一人の親友とだけ心を打ち明け合う文化、自分の時間と付き合いの時間を分ける文化、時間ある限り友達どうし寄り添う文化、同じ目標や考え方の人だけで集まる文化、違ったタイプの人が集まった方がバラエティに富んでおもしろいグループになると考える文化、一見興味の持てそうにないことでもどんどん飛び込んでいく文化、人とは慎重に接する文化…。これだけ様々な考え方の人々が毎日ともに生活する、という環境はなかなか得がたい事だと思いま

す。良い意味でのケンカはどんどんすれば、やがて振り返るといつかは良い経験になっていくものだと思いますが、文化や考え方の違いについての暴力やいじめについては、SISでは特に厳しく指導を受けることとなっています。入学の時に「世界人権宣言」(第2条、何かの違いを理由に差別をしない)に署名したことを覚えていますか？

困ったときには、実は8年生には宝物があります。永久保存版『これからの毎日のために～3つの物語』で、身近に起こりやすいトラブルについて、以前8年生全体で話し合いをしながら学びました。SISで起こりやすい問題については、予習済みなのです！もちろん定型どおりにトラブルが起こったり、考えた解決策がそのまますぐに役立つものばかりであるとは限りませんが、互いの力を借りながら冷静に考えれば、生徒達の力で様々な良い解決策が見つかるのだ、という経験をしたことに自信を持って下さい。プリントを本棚にしまっている人、大事にとっておいたのに内容を忘れてしまっている人、この機会にもう一度よく読み直し、思い出してみましょう。ご家庭の方も改めてご参照下さると幸いです。

9年生から少しずつ、履修計画を自分の責任で立てる範囲が増えていくようになります。HRのメンバーで参加する授業からも、来学期からはもう離れてしまうこととなります。高等部生徒会の選挙権は既に獲得し、誰が生徒会のリーダーにふさわしいか、テレビでの演説を聞きながら真剣に考え、初めての選挙を体験しました。9年生は、インターナショナル・スクールの暦ではHS(ハイスクール)の生徒ですが、SISでも高校生に準ずる存在です。セイバーズでの活動の舞台もHSチームになります。生活・学習・遊びともに一層の自立性が求められるようになります。様々な面であれこれと難しい時期になりますが、自分の力や仲間を信頼して、上手に乗り切って行って下さい。

…それと、困った時には！『3つの物語』を！

中等部3年生

時間を重ねることの大切さ

水口 香

3組担任 英語科

皆さんは一年の時間の流れを「速い」と感じますか、それとも「ゆっくり」だと感じますか。もちろん時間の流れは、その時々条件によって感じ方が違いますが、それは同時にその時の心の状態を示してくれます。時間は決して物理的な流れであるだけではなく、人生においては心の変化の流れ・記憶の連なりだと思えます。

私がまだ中学生だった頃は、一日24時間だけではやりたいことが終わらねず悔しさを感じているかと思えば、やたらおとなの年齢を知りたいと思ったり、お年寄りの人が「またお正月だ」ということばがどんな意味をもっているのかわからず表面的にとらえていたものでした。それだけ、自分の時間の流れにもまた人の時間の流れにも慎重ではなく、受け身的なとらえかたをしていたのです。しかし、現在のように生徒が一年一年みるみる成長する過程をみることができるようになって始めて、人生の一刻一刻の重みを知り、他の人の時間の流れを尊重するようになりました。人の時間の流れも、自分のことのように感じられることはとても大切なことです。生徒一人一人の成長を通して、時間を重ねることの大切さを再確認しています。

さて、いよいよ9年生も中等部卒業という節目を迎えます。私にとって3年前、心配な面持ちで正面玄関で初顔合わせをした時のこと、その後編入生としてやってきた皆さんとインフォメーション・センターで会った時のこと等、全ての出来事の一つ一つ覚えています。生徒の皆も、ナーバスになっていたかもしれませんが、私も実は内心緊張していたのです。そして、一人一人との場面は鮮明に私の脳裏に焼き付いています。その生徒にとってはたった数分、数秒のことかもしれませんが、私にとってはその各場面をその生徒とはもう二度と経験することのない大切な一刻として受け止めていま

す。

卒業を迎える皆さん、おめでとう。また、私自身を育ててくれたことを非常に感謝しています。

高等部1年生

活発に活動しています

新見真人

1組担任 理科

先日の高等部生徒会来年度役員選挙において、数多くの高等部1年生が立候補してくれました。MMTVでの各候補者の選挙演説を聞いていると、それぞれに真剣に学園全体のことを考えてくれているのが良く伝わってきました。皆さん、4月からいよいよ2年生ですね、新役員を助けてより良い学園作りの中心的存在となって活躍してください。私も担任団の一人として積極的に提言や助言をしていきたいと考えています。現時点で考えている生徒会活動に対する提案としては、つぎのようなことがあります。1) 新入生編入生歓迎春の遠足等の企画。2) これまでの学園行事の見直しや新しい企画の提案。3) 学園で起こっている諸問題(盗難・落し物・飲食場所・校内美化・男女交際マナー・バス等の中での公共マナー)解決のための徹底討論会の開催。4) 学校(校長)主催と生徒会主催の朝会の明確化。(例: 隔週月曜日は校長先生等のお話しを中心とするSIS集会。毎月第1水曜日はこれまで通りの生徒会主催ジョイントアッセンブリー。)5) H.R.編成のあり方の検討。(以前のインターカルチャに記載の私見参照。)6) 週1時間(水曜日7校時)のL.H.R.時間の確保。7) 生徒会活動ための予算の確保。新年度はちょうど開校10年目に当たります。皆さんと共に建学の精神(初心)に戻りつつ、大胆な改革も実行して世界に誇れる千里国際学園作りを目指していきます。

さて、今学期の学年の活動としては「お話し会」の企画を続行しています。お二人目として津高絵美さんのお

父さまが『いろいろな電話のお話』というテーマで、特にこれからの電話がどうなっていくのかということを変わりやすく説明してくださいました。今、生徒たちにとっては一番身近に関心が高い携帯電話等の話題だったので、非常に興味を持って聞いていました。

もう一つの活動は、学年研修旅行です。時期としては、来年(2002年)の3月中旬(春休み中)を予定しています。1月後半に17名の委員からなる研修旅行委員会を組織して、これまでに数回の委員会を開き、全員からの意見を取り入れながら旅行先(目的地)の選定を進めてきました。そしていよいよ、今年度最終日(3月13日)の午後には、学年ミーティングを開催し、そこで各旅行地のモデルプランのプレゼンテーションをしてもらい、全員の投票により、旅行地の決定をすることになっています。目的地が決まったら、旅行委員会からどしどし全員の皆さんにも旅行準備に関する仕事が振り分けられてくると思います。乞うご期待!

高等部2年生

私の浪人経験

木村典子

1組担任 国語科

高校3年生の皆さん、御卒業おめでとうございます。あなた達の前に良き未来が待っていることを祈っています。

高校2年生の皆さん、この学校であなた達と一番長く過ごした先輩達の門出です。一緒に祝福しましょう。また1年後には皆さんが卒業です。残り少ない1年を悔いのない毎日にして下さい。

この時期に昔を振り返り、私が高校3年生の時のことを少し書いてみたいと思います。高校3年生のほとんどの人が、この時期進路を決めたことだと思います。中には決まらず1年後になる人もいるかもしれませんが。私もそうした一人でした。結構真面目に勉強し

ていたつもりでしたが、志望校に合格できず浪人しました。女の子で浪人する人はまだ少ない時代でしたので、不合格と決まった時に就職するものだと思込んでいました。発表の後、父と大阪で待ち合わせ食事をしました。父は「勉強は続けてこそ出来るもんや。典子が勉強したいと思うんやったらしたらええ。」とってくれました。それで私は浪人したのですが、その時の私は将来の目標が決まっているわけでもなかったもので、親戚からは「女の子が浪人してまで何になるつもりや。」とか言われました。でも父は目的のためや私からの見返りなどは何も求めずに、学問のために勉強させてくれました。そのお陰で今私は教壇に立つことが出ています。教師になろうと思ったのはずっと後のことです。

浪人しても結局は志望校に合格は出来なかったのですが、あの1年間の経験はきっと私の中で何かの役に立っていると思っています。この時期になるといつも、大きな心で私も見てくれていた父に感謝の気持ちを改めて持つのです。

話題 情報 連絡

中等部一般入試実質倍率は2.3倍

2001年度入試結果

入学センター

2001年度の本校入試結果を報告します。中等部一般選考は、受験者数84名、合格者数37名で、実質倍率は2.3倍となり、昨年より低くなりました。また、高等部一般選考は前回から大阪府内公立中学校出身者も受験資格ができたこともあり、志願者数は22名と増加しました。

(注) 帰国生入試のA選考は海外現地校出身者、B選考は海外日本人学校出身者、S選考は本校が指定した海外日本人学校出身者の中で推薦を受けた生徒を、また一般生入試は国内の小学校・中学校出身者をそれぞれ対象としています。

()内は女子

中等部	志願者数			受験者数			合格者数		
	海外選考	国内選考	計	海外選考	国内選考	計	海外選考	国内選考	計
A選考	11 (10)	19 (9)	30 (19)	11 (10)	17 (6)	28 (16)	10 (9)	16 (6)	26 (15)
B選考	0 (0)	5 (2)	5 (2)	0 (0)	4 (1)	4 (1)	0 (0)	3 (1)	3 (1)
S選考	1 (1)	0 (0)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	1 (1)
帰国計	12 (11)	24 (11)	36 (22)	12 (11)	21 (7)	33 (18)	11 (10)	19 (7)	30 (17)
一般		89 (53)	89 (53)		84 (49)	84 (49)		37 (27)	37 (27)
合計	12 (11)	113 (64)	125 (75)	12 (11)	105 (56)	117 (67)	11 (10)	56 (34)	67 (44)

高等部	志願者数			受験者数			合格者数		
	海外選考	国内選考	計	海外選考	国内選考	計	海外選考	国内選考	計
A選考	9 (5)	17 (7)	26 (12)	9 (5)	16 (7)	25 (12)	6 (5)	12 (6)	18 (11)
B選考	8 (5)	4 (1)	12 (7)	7 (5)	3 (1)	10 (6)	6 (4)	3 (1)	9 (5)
S選考	1 (1)	0 (0)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	1 (1)
帰国計	18 (11)	21 (8)	39 (19)	17 (11)	19 (8)	36 (19)	13 (10)	15 (7)	28 (17)
一般		22 (16)	22 (16)	0 (0)	22 (16)	22 (16)	0 (0)	9 (8)	9 (8)
合計	18 (11)	43 (24)	61 (35)	17 (11)	41 (24)	58 (35)	13 (10)	24 (15)	37 (25)



THE BOOKSTORE NEWS

MARCH 2001



卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。在学中はブックストアをご利用いただきありがとうございました。イヤブックを申し込まれていて取りにこれないかたは、あらかじめお知らせください。

「新」新さざんがきゅーから

進路選択---私の場合

池田大介

進路情報室 社会科

今から十数年前の私は、法学部・法律学科を自分の大学進路に選んだ。

よく生徒からも「なぜ」その道を選んだのか、と聞かれるのだが、(よそ行きの)説明では、いつもこう言っている...

高校2年生の時に、「政経」担当の先生から、「軽犯罪法」なる進路選択のキーワードを伝授され、そこに小さき頃からの疑問(?)であった“立ち小便したら警察に捕まるデ...!?”という巷のオハナシが、実際に存在しているや否やという、多分に出歯亀(この‘デバガメ’という言葉も、池田亀太郎という出歯の変態男がその言葉の由来だったなあ~)的的好奇心から図書館を訪ね、生まれて初めて「六法全書」開いたのである。

私のアルマイト製(?)巨大弁当箱(フタにお茶を入れて弁当をつかったなあ~懐かしい!)より大きく、そしてブ厚いことに、まず素直に驚き、そして、“立ち小便...”に関する部分を見つけた、いや発見、いや発掘、した時の喜びようと言ったら...。その時私は、その「六法全書」自身もつ、他人を寄せ付けぬ崇高なまでのカタサと同化し、自分までもが、そこまで昇華されたような錯覚に陥ったのである(思い出とは、多分に脚色された第三者への自賛物語である!)

そういえば、図書館(静かなんだよねえ~図書館って、池田の経験によると...一つの例外を除いて...)にも本当によく通った...。私の自宅にはテレビがなかったからだ。父親は、前世紀の遺物とも言うべき、恐ろしいまでの堅物(?)で、ある時右手を挙げ家族全員にこう言ったそうである。

「“一億人総白痴化”だ!テレビはこの家に必要なし!」

この英断(?)のおかげで、中学時代の私は、友人(特に女子生徒と...)ほとんど話が合わず、どれほどツラ

かったことか...。しかし、父は、ほとんど毎日(あれだけよく続いたなあ~、と思う...。父はスゴかった!?)のように、姉・兄・私・妹(5番目の妹はまだ小さかった)の4人に対して「本」を手渡し、人類のほとんどがどれほど多くの素晴らしい本に出会わずして死んでいくかを、何万回となく握り拳で演説したのであった。

実際父も大変な読書家で、最近とうとう本が実家に収めきれなくなって、蔵書用に一軒家を建ててしまうほどである。その一戸建ては、書籍保管用に太陽光線を遮断するため窓が一つもなく、不気味と近所で大評判で、「箱根細工の家」とも呼ばれているらしい...

中学時代は真剣に父を恨んだものだが、高校に入学すると、だれもが良い意味での「隣は何をする人ぞ」になり、それぞれがそれぞれ、てんでバラバラのことを一つの教室で行っており、(これ見よがしな!)‘なかよしこよし’はなくなった。ガリ勉(なつかしい響き!)するもの、しゃべり散らしている者、ヒンズー・スクワットをして汗を飛び散らしている者、‘早弁’している者...。お互いがお互いを妙に尊びあい、そして干渉しない...。もちろん妙な詮索もなし...。古い公立高校によく見られる(?)光景が展開され、ようやく私は自分の居場所を見つけた心地であった。

公立高校の、雑食的(?)、‘これでもか’的カリキュラムには、時には閉口したが、激しいクラブの練習が始まる放課後までは、休み時間、カットの時間(本校でのアンスケ時間)には、教室の自分の机(1年間決まっていた。SISでは考えられないでしょう...)で、はたまたクラブの部室で(汚いけどなぜか居心地がいいのだ!)、大好きな「推理小説」をむさぼり読んだ。本校へ来て、卒業生でW稲田大学で哲学を専攻しているN村Y世君が、今も

池田がハマっているK極N彦を紹介してくれた時には、フッと昔がよぎり、「うんうん、おまえもか、おまえもか...」と、肩をポンポンと思わずしたくなった程である。

あ~長々と書き綴ってしまったが...

私の学生時代には、その先生を、尊敬して、崇拜して、盲信して、その先生の考えに傾倒した、ということはありませんでした。あまりなかったような気がするが...。「へ~」というキーワードを与えてくれた先生はいた(うん、本当)!

私の学生時代には、その作者を尊敬して、崇拜して、盲信して、その作品に傾倒した、ということはありませんでした。あまりなかったような気もするが(作者をこき下ろし、いっばしの批評家ぶっていたことはあった...恥ずかしい!)...「へ~」というキーワードを与えてくれた本や作者はいた(うん、本当)!

...最近本を読んでいないな~...。読書は教師の大切な仕事の一つだと思うんだけどなあ~(プチプチ...)...

(注)「さざんがきゅー」の由来
進路情報室の部屋番号は339です。

図書館 UPDATE

青山比呂乃

図書館

* 卒業によせて

今回の卒業生みんなの印象を一言で言えば、個性的、でしょうか。中1に入ってきたとき、AB選考で入学した人が結構多く20人以上いて、その人たち全員が、当時私が始めたばかりだった「日本語リーディング」というクラスに入ってきたのです。その当時からすでにどんなに個性豊かだったことか。例えば、新しい漢字を作ってみる授業では、太田浩之君は、毒、と、林、という字を組み合わせて、「サリン」と読ませ、その春に起こったばかりの地下鉄サリン事件を反映させていたし、クラスの最後に自由なテーマで取り組んだレポートでは、シェルトン恵美理さんは、夏目漱石と坊ちゃんについて、中村路子さんは画家ルノワールの絵と人生について、中川勝之君は阪急電車について、といろいろなテーマを取り上げていました。そして中1の3学期の基礎理科での科学者レポートでは、実に多様な演劇系のプレゼンテーションを繰り広げてくれた思い出がよみがえってきます。

さて、卒業生はこれから、温室である「学校」という場を巣立っていきます。今まで慣れ親しんだ仲間、先生方とは違って、風は冷たく立っているのもやっと、という状況に陥ることもあるでしょう。自分の個性を生かしたつもりでの自己主張も、「わがまま」としか見てもらえない場合も出てくるかもしれない。逆にもっと自分を出さなければ、使いものにならないと冷たくあしらわれるかもしれない。基礎的なトレーニングばかりで、ちっとも面白くない、もっと自分らしさを出せることをしたい、なんて思う場面も出てくるでしょう。

でもこれからが、やっと本当の始まり。いよいよ切磋琢磨して、本当の自分の個性に磨きをかけていく時です。そのためには、今までやらずに済んできた面白くないような基礎の積み重ね

がもっとも必要とされる場合もあるし、今まで以上にいきなりより完成されたユニークな物を！と求められてしまうことだってある。自分に課せられた期待に責任を持って応えていってほしいです。自分で、自由と責任、その素晴らしさと重さをしっかりと担う時です。卒業しても、何か必要があったら、何時でも連絡してください。出来る限りご相談にのりますよ。では、お元気で、卒業おめでとう。

* 蔵書点検

図書館では、図書館にある全ての資料を点検、存在を確認し汚れ具合などもチェックする蔵書点検 (inventory) という作業を年に1回、行っています。この期間中は図書館の本の移動は一切出来ないため、借りたい本はそれまでの間に借りておいてもらうことになり

ます。(今回は2月28日(水)以降3月13日(火)までに借りた本は、4月5日(木)まで借りられます)

昨年度分は2000年6月に行いましたが、今年度は2001年3月にしようという事になり、SISが春休みに入り、OIS中高がキャンプに行っている期間、14日から16日にすることになりました。そのうち最初の2日間はすでに皆さんに呼びかけて、ボランティアの人たちにお手伝いをお願いしています。図書館の蔵書はすでに4万7千冊を越えていて、入力するだけでも結構な手間がかかり、更に今回は大幅に本の配置場所の移動をする予定ですので、今からでも手伝ってもよいという人は、図書館の方まで至急連絡してください。9時から4時ごろまで作業をしています。

CDデビュー しました

高等部3年中村路子さん、^{そんるい}宋睿君、飯塚啓介君の3人が結成しているユニット「コアオブソウル」がこの春CDデビューし、FM CO-CO-L0 (76.5MHz)で放送されました。

(関西版「ぴあ」2/13号より)

新生活のコツ

弥永千穂
保健室

気がつけばもう3月。すぐそこまで春が来ているのですね。12年生の皆さん卒業おめでとうございます。学校生活どうでしたか？ たくさん思い出ができましたか？ 今は新生活に希望と不安で胸がいっぱいではないでしょうか。

私も1月に福岡から大阪に出てきて病院から学校という違う環境で働き始めているので皆さんの気持ちをついこの間味わったばかりです。「大阪の人はなんかこわそう、言葉分るかいな？」「生徒とうまく話せるとかいな？」などいろいろ考えていました。

私は生徒の皆さんの関西弁は理解できるのですが・・・皆さんが私の母国語・博多弁(?)聞き取れているかと少し心配しています。とはいえ私自身はそんな違いを楽しみ皆さんのパワーをもらいながら学校に来るのが楽しい今日このごろです。

12年生の皆さんにも新生活できっとステキな出会いが待っていると思います。とはいえ新しい生活の中で自分が見えなくなったり・・・自信が無くなったり・・・この道に進んできて良かったのかな?と思いをめぐらせたりすることもあるでしょう。実は私自身、新生

活のストレスで体調を崩したこともあります。だからこそ学んだ新生活のコツは少し肩の力を抜いてリラックスすること。新生活ではその時ばかりに目がいってストレスをため込みがちになりますが、長い目で自分をみつめて自分を表現していたらなんとかなるよって思うのはどうでしょうか？皆さんは自分の体とまだまだあと70年位お付き合いしなくちゃいけないから無理しないで心と体を大切にしてくださいね。

SIS/OIS高等部生徒会執行部選挙結果

山本靖子
英語科

2月14日に日行われました高等部生徒会の選挙結果を下記のとおりお知らせします。今後、引継ぎ期間として現生徒会メンバーとともに活動を行っていきますので、色々とお世話になることも多いと思いますが、旧メンバー同様よろしく願いいたします。

I will be happy to announce you that the following candidates were elected for the next Student Council on the 14th Feb. Please congratulate them. Thanks.

SIS

会長(President)	今田順子 Imada, Naoko (10-4)
副会長(Vice president)	谷紗妙佳 Tani, Saeka (10-2)
書記(Secretary)	井上咲姫 Inoue, Saki (10-2)
会計(Treasurer)	森阪綾乃 Morisaka, Ayano (10-1)
通訳(Translator)	藤本 卓 Fujimoto, Taku (9-3)

OIS

President	Sayoko Nakamura
Vice president	Ami Maeda
Secretary	Chiaki Nakata
Treasurer	Matthew Waterhouse
Translator	Aya Mitani

千里国際学園基本方針

千里国際学園では、自分の行動に責任を持ち、よい人間関係を維持していく能力が、生徒各自に備わっていると信じます。この考えにもとづいて、次のような行動の目安がつくられています。

< 5つのリスペクト >

- 自分を大切にする
- 他の人を大切にする
- 学習を大切にする
- 環境を大切にする
- リーダーシップを大切にする

<授業より> 環境にやさしいプロジェクト

～アクリルスポンジ“サラット君”とエコクッキング～

廣田文野
生活科学科

まず、この場をお借りして、お礼を言わなければなりません。前回の「空缶回収で森を救おう！」では、みなさんの多大なるご協力に支えられ、無事成功に終わりました。本当にありがとうございました。

今学期、生活科学3を履修したのは14名。いつもより10人近くも少ないという状況がプロジェクトの実践にどう影響するのか...開始当初、多少の不安はありましたが、それを裏切る充実した成果を目の当たりにし、またもや生徒の発想の豊かさと創造力に感服している私です。

今回はまず、人数の少なさもあってアイデアの捻出に苦労しました。繰り返されるディスカッションのなかで、尊重されていたのは「今までにないもの」「お金儲けに走らないこと」でした。彼らがたどったプロジェクト実践への流れは以下の通りです。

プロセス1：環境問題のグループ・リサーチ

プロセス2：リサーチのグループ・プレゼンテーション

プロセス3：プロジェクトの選定

プロセス4：グループ分担によるプロジェクト実践への準備

プロセス5：プロジェクト実践

どのプロセスにおいても環境への配慮がなされていること、また、グループ活動の基本とも言えると思いますが、各自が自分自身の役割分担に責任をもち、やり遂げるということに重点を置いています。特に、プロセス4は時間を費やし、プロジェクトを成功に導くために各人が考え、行動し、反省する大切なプロセスです。今回のプロジェクトでは、「水質汚濁を防止する」という目的のもとに洗剤使用を減らす“サラット君”の配布、生ゴミ削減のための“エコクッキング”が採用されました。役割分担としてはアクリル

ル毛糸を使ってひたすらサラット君を編み続けた「アクリル」班、ゴミとして捨てられてしまう物をいかに工夫して安価で手軽なレシピを作るか？を追求し、試作を重ねた「クッキング」班、そして、アクリル毛糸が集まらない現状の打破のために、プロセス4の中で自然発生的に発足したのが「CM」班でした。結局、アクリル毛糸はあまり集まらなかったとは言え、大迫先生、真砂先生、高橋先生のご協力のおかげで、MMTVでの放映は大反響で、このプロジェクトへの理解は深まったような気がします。

初出演に緊張する竹上君、安東君に適切なアドバイスを下さったMr. Kramm、サラット君の改良にむけて使用後のアンケートに答えて下さった保護者会執行部の方々、9年生の保護者の方々、残った材料をとっておいて寄付して下さい下さったカフェの方々にも感謝しております。ありがとうございました。

水質汚濁問題についての僕たちの取り組み

安東伸弥

HFL3クラスCM班

私たちは今、G9のHFLの授業で環境問題について学んでいます。その中でも私たちは水質汚濁問題に重点をおき、プロジェクトを実践することにより、多くの人にこの問題に関心を持ってもらおうとしています。水質汚濁の最大の原因となっている家庭用洗剤の使用をなるべく控えるため、私たちはアクリル毛糸からできるアクリルスポンジ“サラット君”を作り出しました。

この“サラット君”と呼ばれるアクリル毛糸からできているスポンジは洗剤を使用せずに食器の汚れを洗い落と

せる画期的なものです。確かに、家庭用洗剤を一切使用せずに食器の汚れを落とすことはできませんが、せめて、1回1回の洗剤使用料を控えるために、アクリル毛糸を使用し、少しでも、地球環境の保護に貢献できれば、と考えています。名前の通り、“サラット君”は食器の汚れを洗剤なしで“サラット”落とす事ができます。

皆さんの中にももうすでに使用されている方もおられると思いますが、皆さん一人一人の協力によって汚れた水を、もう1度きれいに復活させる事ができます。

竹上貴之

HFL3クラスCM班

水質汚濁を防ぐための『サラット君』以外にも、エコクッキングにも力を入れています。エコクッキングとは文字通り再生料理です。再生と言うのはできた料理に+ するのではなくてできた料理の横にあるいつもならゴミとして捨てられてしまうもの、例えばジャガイモの皮やにんじんの皮、みかんの皮（皮にこだわっている訳ではありませんが...）パンの耳などを使う。ゴミ扱いにあっている物を、おいしい料理に導いていく、というのが僕たちの活動している一つのエコクッキングです。

このエコクッキングの目的は何よりも家庭から出るゴミを少しでも減らすということです。ゴミ問題は今、ニュースでも話題になっている通り、地球環境にとって深刻な問題になっています。そして生ゴミもやはりその中の一つであり、また、焼却炉を使って処理されるものなので二酸化炭素も大きく関係してきます。そうして地球はどんどん“傷付けられていく”のです。そのような問題を少しでも改善す

(次ページへ続く)

<授業より> IB History 校外学習

OIS-SIS Japanese History Field Trip

Shammi Datta

社会科

OIS-SISのIB Historyクラスは12月16日(金)に京都へ校外学習に行きました。二条城・妙心寺を見学しました。

京都の歴史、自然と建築の調和、平安時代から近現代の京都の建築や庭園、禅について学習・見学すると共に、参加者にとって高校生活の楽しい思い出の一つになったと思います。

The IB H level history class visited Kyoto as part of the history curriculum on Nov. 16, Friday. We saw the Nijoujou palace and learnt about the significance of this monument in Japanese history. The participants appreciated the blend between nature and traditional Japanese architecture. In addition, the trip will probably remain with the participants as a fond memory of their high school days.



(前ページの続き)

るためにエコクッキングという活動をしています。

今までで作った料理は数々あり、みかんの皮を使った美皮家(マーマレード)、ジャガイモの皮を使ったチップ、キャベツの芯を使ったエコノミ焼き(お好み焼き)、パンの耳を使ったパンYEAR2001(パンの耳を揚げて砂糖をまぶしたもの)、グラパン(パンの耳を使ったグラタン)、あらゆる野菜の皮や芯を使った菜再スープ(野菜スープ)、リンゴと人参の皮を使ったエコXジュースと、全部自分たちで作り上げ、そして松尾トモヒロのユニークな発想により生まれたネーミング。完成までは多大な時間を費やし、苦心する事もりましたが、料理が成功した時の嬉しさは苦しみの2倍以上

で皆からも自然と笑みがこぼれました。

そして今までのプロセス集大成として、また、もっとみんなに環境問題に関心を持ってもらうために、2月19日に試食会を開く予定です。そこで『サラット君』も配布します。(今月のインターカルチャアの発行の頃には、もう終了しているはずですが・・・。数に限りがあったのでもらえなかった方、ごめんなさい。)みなさんもぜひ水質汚濁問題について考えてください。みんなの水を守るために皆さんの御協力をお願いします。そしてエコクッキングにも挑戦してみてください。協力してくださった皆さん、本当にありがとうございました。

本校は、1998年度より、それまでの4学期制から各学期同授業日数の3学期制(60日×3)へと移行しました。4月～6月を春学期、9月～11月を秋学期、12月～3月を冬学期と呼んでいます。

また1999年度には、大阪国際文化中学校・高等学校(OIA)から千里国際学園中等部・高等部(SIS)へ校名変更。同時に、中3以上の授業は一部を除いて「学期完結制」となり、高等部では学期ごとに単位が認定されるようになりました。このため、各学期で履修科目、時間割が変わります。

<授業より> 無限」についてのレポート発表

馬場博史
数学科

数学の授業では、数列の極限、関数の極限等を考えるのに、「無限」という概念が欠かせません。今学期も冬休みを利用して、「無限」について話題にしている本を読み、本の紹介と考察したことをレポートしてもらいました。その一部を掲載します。

「対話でまなぶ数学教室」1. 数はひろがる

志賀浩二著 岩波書店
無限と連続 p.100~p.109
井上幸彦
高等部2年

対話という形式で難しい話がどんどん説明されていくという、ある意味おかしな本だったが、図書館でほかのどの本を見てもわかりづらかったのであえてわかりやすそうなこの本を選んだ。登場人物からして先生、かず子さん、山田君の三人だけで、とても小学校の授業風景がうかがえそうだが、話の内容はそれとは全く違っている。

19世紀後半に現れた数学者カントルは2つの集合MとNに対し、Mの元とNの元との間に1対1の対応が存在するとき、MとNとは同じ濃度をもつと言ったそうだ。この考えを無限集合に対して適用したら、まず彼は無限集合のもっとも典型的なものとして自然数の集合Nをとった：

$$N = \{1, 2, 3, 4, \dots\}$$

そしてNと同じ濃度をもつ集合としてどんなものがあるか調べるのに、偶数の集合Eをとってみると：

$$E = \{2, 4, 6, 8, \dots\}$$

$$N: 1 \ 2 \ 3 \ 4 \ \dots \ n \ \dots$$

$$E: 2 \ 4 \ 6 \ 8 \ \dots \ 2n \ \dots$$

となって1対1に対応するので、NとEは同じ濃度をもっているということがいえる。

こうやって自分で書いていても少しややこしい話なのだが、読んでいれば意外とわかりやすかった。普通の本では答えられていないような素朴な質問

を山田君とかずさんが遠慮なく吐き出すからだ。彼らが言うように、EはNの一部なのに、Nと同じ濃度をもつというのは有限個の集合では決して起こらない。無限というのはふつうの常識では測りしれないものがある。カントルはこのようなことが起きることこそ、無限というものの本質なのだと考えたのだ。彼は偶数のほかにも有理数の集合Qを調べた結果、同じ濃度をもつことがわかった。

また、カントルは背理法を使って実数の集合は自然数の集合とは1対1に対応しないことを示した。過去にとった数学のクラスで背理法というものは習っているが、まさかこんなところで再会するとは思ってもいなかった。一つ無限についてわかったとすれば、無限について考える際には常に奥へ、奥へと迫るべきなのだろう。ミクロの無限もあれば、遠い宇宙のかなたの無限もある。手では届かないぶん(足をつかう、というわけではないが(笑))、まるで対抗するかのよう無限の想像力を必要とする。人間ならではの屁理屈と言い換えられるかもしれない。

「ゼロから無限へ」数論の世界を訪ねて
コンスタンス・レイド著 芹沢正三訳
「...の話」
前田信彦
高等部2年

「無限集合とは、その本当に一部分である集合との間に、1対1の対応がつけられるような集合のことである。」全くもって、その通りである。その一つの例として、この本にはこう記されていた。「1cmの線分の上にも、1kmの線分の上と同じだけの数の点がある。」そ・そんなこと、あ・あるわけないじゃあないか。1cmの線分と1kmの線分・・・感覚的に考えると、1cmよりも1kmの方が長いから、1kmの方がたくさん点をとる事が出来るにきまっている！でも待てよ・・・。

1cmの線分にも1kmの線分にも無限に点をとる事が出来る。だから、1cmの

線分の上の点よりも1kmの線分の上の点の方が多く、ともいえないし、少ない、ともいえない。そもそも、多い・少ない・等しい、という性質は有限集合に対してだけ考えられるものであって、無限集合に対しては全く無意味なものでは無いだろうか？そうではないか？前田君よ。

貴公がそう仰せられるのもよくわかる。しかし貴公のその考えを逆手にとり、こう考えてみてはどうか。1cmの線分にも1kmの線分にも無限に点をとることができ、終わりはない。その終わり、がないからこそ、全ての1cmの線分の上の点と、全ての1kmの線分の上の点との間には1対1の対応が見出されるのである。こう考えてみると、「一日の間と一年の間には同じだけの時刻がある。」などといった、一見ありえなさそうなことも証明できる事になる。

こうやって考えてみると、納得する事ができる無限の話だが、一見とても奇妙で不思議である。この考えを見出すに至った数学者カントルは、こういっている。「私は、ほとんど自分の意に反して、このような論理的な結論に達せざるを得なかった。」また「この考えに反対する理由は何も無かったのである。」と。要するに、彼自身、この考えを導き出したときは、自分の中でも結構気持ちよかったのではないだろうか。それは自分が今までやってきた、自分自身の数学の歴史、世界、概念に反するからであろう。しかし、彼はそれを切り捨て、論理的にこの考えを導きだした。それこそ、数学の本質的なところなのだと思う。

無限の世界に立ち入るために、時には我々は日々使用している日常的な概念や感覚を、論理的な理由により切り捨てなければならない事もあると思う。しかしそれにより、全てのどのような事でも数学により理論化することが出来るのだと思う。それが数学の本質であり、また自由な面でもあるのではないか、と思った。

健闘！ APAC女子サッカー 2位男子バスケット4位

The Girls' Varsity Soccer John Serle

Girls' Varsity Soccer Coach

The Girls' Varsity soccer team came second in the recent APAC tournament losing in the final to Seoul Foreign School 2-0.

It was a wonderful tournament. Despite their relative young age once again the girls represented the school with great class, winning admirers with their play and toughness. The highlights were a 1-0 victory over CA and a 4-0 victory over Shanghai, which ensured our place in the final. We finished the tournament by winning three games, drawing one and losing one, conceding two goals and scoring six. Congratulations to the four OIS ninth graders, who represented the school.



Saber "Hoopsters" Complete Successful Season

Stephen Bonnette

Boys' Varsity Basketball Coach, Music

Seoul Foreign School hosted the 2001 APAC Boys' High School Varsity Basketball Tourney in Korea January 31st - February 4th, closing the book on a very successful season for the Saber squad. Although the team's fourth place finish was the same result as last year in Shanghai, coaches Heimer and Bonnette both felt that this year's team was more balanced offensively, and more tenacious on the defensive end. An improved record in the round robin, a close defeat to eventual finalist Beijing and three strong quarters against a talented Seoul team provided strong evidence that the Saber program is improving each year. Tournament highlights included a victory over Shanghai (a team that beat us last year) and a thrilling come from behind victory over rival



Canadian Academy. In the pivotal 3rd quarter, Osaka clawed its way back from a 19 point deficit, setting the stage for Matthew Waterhouse's dramatic three pointer as time expired in regulation. With .6 seconds left in OT and the score tied at 49, Shinichi Iriyama (SIS grade 11) was fouled and sent to the line. He calmly swished his first free throw, completing the greatest comeback victory in Saber history. Harsha DeCosta's outstanding play at both ends of the floor earned him all-star honors. His ball control and creativity on offense,

combined with his toughness on defense and under the boards were crucial elements to our team's success. Coaches Heimer and Bonnette are extremely proud of the team this year and would like to congratulate every member for their hard work and dedication throughout the season. The APAC coaches awarded our Saber team the Sportsmanship trophy at the closing ceremony confirming that not only are our kids great student athletes on the court, but fine young men off it. Omedeto Gozaimashita!

M 女子サッカー男子バスケットも活躍

Middle School Girls Soccer

Catherine Brown/Leanne Stephen

MS Girls Soccer Coach

The Middle School Girls Soccer team had an excellent season in which all players worked exceptionally hard. With only twelve players in the squad it looked as if they would have a hard time placing highly in the invitational tournament at Canadian Academy, but the girls played with such dogged determination that they were able to reach the final. Unfortunately we lost to Canadian Academy in the final match, but it was an exciting game and closely fought.

Although the tournament was played in freezing rain and strong winds, the girls were uncomplaining and their strength of spirit was admirable.



Middle School Boys' Basketball

Josh Berg

MS Boys' Soccer Coach

The talented and tough middle school boys' basketball squad finished a perfect season on January 27, repeating last year's performance as tournament champions in Nagoya, and finishing with a 13-0 overall record. Captains Yohei Takami and Tejas Chotai (OIS Grade 8) were instrumental to the team's success throughout the season, and they received timely help from the other members of the squad. SIS teammates included Taka Nagao, Tomoyuki Fukuchi, Ryo Nishino, Michael Tanaka, and Tomohiro Hata, and OIS players joining Yohei and Tejas were Hiro Hagiwari, Evan Shore, and Taemon Song. The team was coached by Mr. Josh Berg and Mr. Simon Parker, and managed by SIS students Mari Yamada and Haruna Sakai. Congratulations!



APAC Schedule 2001

Mark Pekin

Athletic Director

Outlined below is the schedule for this year's events and the school looks forward to more exciting competition and rewarding experiences for students traveling overseas representing SISF.

Girls Basketball	April 19-21	Shanghai, China
Boys Soccer	April 19-21	Brent, Manila

千里国際学園のチームスポーツは千里国際学園中等部・高等部(SIS)と大阪インターナショナルスクール(OIS)の2校で1チームを編成しており、この形態での参加を認めるAPAC(Asia Pacific Activities Conference)の公式試合や、近隣のインターナショナルスクール、日本の中学・高校との交流試合等に参加しています。

< APAC 参加校 >

北京インターナショナルスクール(中国)、上海アメリカンスクール(中国)、プレントインターナショナルスクール(フィリピン)、ソウルフォーリンスクール(韓国)、カナディアンアカデミー(神戸)、千里国際学園(大阪)
(注)「セイバース(The Sabers)」は千里国際学園スポーツチームの愛称です。

箕面市民マラソンで4名優勝

馬場博史

トリアスロンクラブ・ランニングクラブ顧問、数学科

箕面市民マラソン大会

2月11日(祝)、箕面第2総合運動場とその周辺で、恒例の箕面市民マラソン大会が開催され、本学園から生徒・教員が多数参加し、参加者全員が元気に完走しました。また、そのうち4名が各部別で優勝しました。

<優勝者>

5km中学女子 吉田芙美(SIS7)
 5km中学男子 長尾隆弘(SIS8)
 5km高校女子 長みさき(SIS10)
 10km40才代男子 馬場博史(教員)



箕面市民マラソン大会表彰式を終えて

箕面市民オリエンテーリング大会

2月25日(日)は箕面教学の森野外活動センターで箕面市民オリエンテーリング大会が開催され、本学園から5グループが出場。藤本卓(SIS9)、Yoshiyuki Hagiwara(OIS10)ペアが1位になりました。

茶道を体験して

広瀬雅人

高等部3年

1999年の春、私は千里国際学園茶道部が主催するお茶会に招かれ、友人と共に出席した。これが私と茶道の最初の出会いだった。それは一緒に出席した友人にとっても同じ事だったにちがいない。私たちは茶道のなんともしえない緊張感に魅せられると同時に、日本文化への関心もあって、その年の10月に茶道部に入部した。

茶道部は私の想像した堅苦しい世界とは全く異なり、そこにはのんびりとした時間が流れていた。バスの時間さえなければ、時計というものが不要なものであるかのようにすら感じた。

部員の心は一つにまとまっていた。誰もが茶道を学びたいという気持ちであふれていた。新入部員が入れば、皆、自ら進んでお茶の飲み方から指導した。

茶道部の特権は毎週お菓子とお抹茶

をいただくことができること...。しかし、現実にはこの“決まり文句”以上の特権があった。花についての知識が増

えた。季節の移り変わりを考えるようになった。そして、茶道を学ぶ事で日本文化の奥深さを知ることができ、そのすばらしさに気付く事ができた。1年と少しの間に、学校茶道のお茶会に参加したり初釜に招かれるなどして、様々な事を学ぶ事ができた。

私たち12年生は、この3月で千里国際学園を卒業する。現在、茶道部には4人の12年生(松本靖子・西本明美・福田久俊・広瀬雅人)がいるが、この



茶道部奨励証書授与式 2007年1月9日

学校を卒業すると同時に、千里国際学園茶道部も卒業する事になり、今まで茶道部で学んできた事の証しとして、裏千家家元から「奨励賞」を贈られた。

私は、今後も何らかのかたちで茶道を続けていきたいと思っている。

最後に、私たちに茶道を通して日本文化に接する機会を与えてくださった先生方に、深く感謝の意を表したい。

Leaving Faculty

Julie Wagner
OIS Head

This is the time of year when faculty members are making decisions about their futures. Those who are moving on generally announce their plans now. It is always sad to see long-standing members of the faculty take leave as those of us who jealously hold on to memories of the school's early beginnings worry about whether the school will stay the same when they go. Although all the people I will announce below will be sorely missed, we also must remember that change can be good both for a school and for those who move on. Change is one of life's realities and, although people and ways of doing things in a school may change, it does not mean that the change will not be good.

Gary Rust, our Business Manager, has resigned and will be returning to the United States next year. Gary has been with the school for seven years in which time he has had advancement and business office responsibilities. Gary has been an important link for parents and faculty in OIS with SIS and Hankyu. I have appreciated working with him on a variety of school matters this year. His dedication to the school is unquestioned and his presence will be missed.

Suzuyo Rust is a member of our Japanese department and has taught from elementary through high school. Her commitment and enthusiasm for teaching will be hard to replace. As a part-time teacher, she has given full-time energy to the education of her students. We wish the Rust family well in their new adventure.

Jodi Bonnette, who is currently on a one-year leave from school, has also decided not to return to school so that

she can spend time with the Bonnette's three children. Jodi has been instrumental in the development of the three/four multiage curriculum and in grades one/two where her interest in portfolios, assessment and curriculum were of great value to the school. She is a dedicated teacher and always gave totally of herself for the students in her care. She particularly taught her students about special needs children which is an awareness they will care with them all of their lives.

Leanne Stephen has been a member of the art department from the beginning of the school. She has been the Art Department Coordinator in recent years and this year was IB Coordinator. Her work with curriculum has been excellent, as has her attention to detail in coordinating positions. The students have profited from her enthusiasm for teaching and her keen interest in the philosophy and mission of our school have often helped our two schools find common ground. Leanne will be returning to Australia at the close of the school year and we wish her well in her future.

Amanda Pekin has resigned her position as elementary physical education teacher. She is presently taking a one-year leave to be with the Pekin's two small children, Georgina and Alexander, and has decided to stay home with them for the foreseeable future. Amanda was with the school for three years. In that time, she created an exceptional PE program for our students, coached swimming, ran gymnastics and swimming clubs, worked with school productions at all levels and helped produce the Unified Arts Concerts and the Undokai. Amanda's energy and enthusiasm will be missed by all

of us.

I have also resigned from school effective July 31, 2001. This has been a difficult decision as my work at school has absorbed a fair part of my adult work life. The ten years that I have spent at OIS have been extremely rewarding both personally and professionally. This unique opportunity to work with my OIS and SIS colleagues to produce student after student who can function well in both Eastern and Western cultures has been an experience few educators ever get to realize. I have truly enjoyed the parents, students and faculty that I have had the pleasure to work with over these years. I will sorely miss OIS when I leave. In the meantime, however, I have six months of work ahead of me in which I will attempt to continue to serve the needs of the school.

A search for a new Head of School has been underway for the past few months. Karin Caffin is leading that search. Members of the Search Committee are: Steve Bonnette, Marvin Zulauf, Wakaba Mori, Karin Caffin, Carl Kay (PAC representative) and Hirokazu Osako (SIS representative). The Committee has been meeting since October to review applicants for the Head's position. Three finalists for the position have been selected. They are:

Bill Pearson S i n g a p o r e
American School

Andy Page-Smith United Nations
International School, Hanoi

Ken Hillman I s t a n b u l
International Community School

Each candidate will be at school for two days, meeting and talking with a variety of people including students, teachers, parents, and administration. A new Head will be announced before Spring Break.

Middle/High School Update

John Searle

OIS Middle and High School Principal

APAC is one of the aspects of our school, which contributes to the vision of a dynamic and exciting education. The school's great appreciation goes to Mark Pekin for developing APAC to such a level. It provides those benefits that we all know travel affords; the opportunity to see different cultures, make new friends, and develop a sense of independence and responsibility. Going on these trips is exciting, but it is not a holiday. We expect our teams to be determined, to display skill and insight in their game. We expect our students to be polite and respectful at all times, and to be great ambassadors for the school. In this sense APAC should not be seen as an add-on activity separate from day to day school life, but rather an extension of what we hope a good school offers - opportunity and experience.

Many schools make participation on the team dependent on a certain grade average. At Osaka, while we have resisted this route, participation is conditional. Participation from the school's point of view is dependent on a student's level of responsibility. This means that a student, whose grades may be low, may still be able

to go on an APAC trip, as long as we are all convinced that the student is doing everything they possibly can to make the most of their school life. This means working hard, attending to all their class responsibilities and also contributing to a positive and productive school life. I would always like to ask this question of a student, "What are you contributing to school?" In some respects these are more severe conditions than just getting good grades, because we are saying that the students have to be exemplary representatives for their class.

To go on a trip the students must receive the permission of their parents, the coaches, their teachers and the Principal. Each player who joins a high school team is given a letter at the beginning of the season in which they indicate whether they would want to attend, should they be selected for the travelling team. It is really important that the parents discuss this decision with their children at this stage.

Self-Esteem

I came across an interesting sports poster at the APAC soccer tournament. According to the information, girls who participate in sport are less likely to suffer from breast cancer at any time in their lives, more likely to leave an abusive husband or partner, less likely to become pregnant before they intend to, and less likely to miss school or work because of illness. These were the most striking claims among a long list, and undisputedly great reasons for promoting women's sport. I have over the years, read many research articles on the same topic which drew similar conclusions.

It is not so much the therapeutic effects of exercise, which create these

conditions, but more the sense of self-esteem that being good at something creates. Self-esteem comes from three things: competence in doing something well; confidence in achievement; and the feeling of belonging to a group or contributing to a community. Playing sport lends itself perfectly to participants developing these feelings.

As parents of teenage children we all know what a traumatic period of physical, intellectual and emotional development it can be. It strikes me that much of what we do in school, for all our middle and high school students, is about creating a sense of competence, confidence and a feeling of belonging. When we have been successful in doing this, the results are spectacular for the student. If I could generalise I would say that our most successful students are those who worked hard to create competence in all they do; have the confidence because of this to always go for the opportunity and are not afraid of failing; and are fully involved in school life beyond just the requirements. If they are not athletes then they are probably musicians, or helping with student council or are involved in service activities. Some, of course are all of these.

Conversely the students I worry most about may not be working hard and therefore struggle to feel a sense of competence. They may lack the confidence to try something new and are easily influenced. Or they may be uninvolved in school life in any way beyond just coming to their classes.

Urging teenagers to work hard can sound so old fashioned, in this age of comfort and convenience. However if we want our children to have self esteem and therefore be healthier and more balanced, the bottom line seems

千里国際学園中等部・高等部 (SIS)ではこの広報誌"インターカルチャ"が発行されていますが、併設の大阪インターナショナルスクール(OIS)では毎週金曜日に"Educator"が発行されています。

ここでは"Educator"の記事の中で、OISの様子がよく分かるものやSISと関連する話題等をセレクトして掲載しています。

to be that hard work will pay off because we know that it will bring competence and confidence. Along with this we also expect every student to be involved in and to contribute to the sense of community for others'

benefit, and also for their own.

I want students to be thinking about what they can do for the school community and how the school can be a better place for them. As a partnership, parents and the school

can do no greater service to our students than create the conditions whereby competence, confidence and community can be achieved and then require students to work hard and get involved.

Elementary Update

Karin Caffin

OIS Elementary School Principal

This school is one of the busiest schools in which I have ever worked, and the pressure is constant. For a small school, we manage to get a lot done, and we need to remember to congratulate ourselves every now and then. The students feel pressure to succeed in all they do, and I believe that some pressure is good. The question is, when does encouragement become too much pressure?

When my oldest son gave up his study and got a job late last year, I went through a range of emotions. I was disappointed that he was not going to fulfil the plans he had made with us, mad that he was throwing away the opportunity to study, glad that he could now support himself, and apprehensive about how I would explain it to relatives and friends. This confusion of emotions made me think about my plans for my children, and indeed, how I would need to be very careful that my ambitions for them did not overrule their needs, interests and abilities. I acknowledge that children need guidance, but who makes the plans and where does one draw the line between guidance and living one's life through one's children?

This conflict is something that I see almost every week. Parents want the best for their children, and sometimes cannot understand why their children

do not want to do certain things. All parents love their children and try to give them the best they can afford, be it education, music and art lessons, sports competitions and various week night or weekend classes. Many parents become so intense about their hopes and aspirations for their children that they lose sight of the capabilities of their children. Many parents find it difficult to accept that their child may not be musically inclined and not want to learn to play piano or violin, why their child is not interested in competitive swimming, why their child is having difficulty learning a second language or being an avid reader. Many parents find it hard to accept that their children have different learning styles to theirs and, in fact, may have different intelligences. Every parent wants their child to be very successful at school, to get those 'A's that seem to be all-important. But what is success? For one student it may be an 'A', but for another it may well be a 'C'. The important thing is to know and to value each individual child's efforts, to acknowledge the success that they are capable of and to encourage them to do their best. As long as your child is working hard, trying to improve on their best, and is happy, then they will achieve success. Too many times I have seen children 'pushed' too hard, beyond their capabilities, only to end up 'giving up', and then having to live up to their parents' disappointments.

This just confirms the cycle of disappointment and some students withdraw from being involved. I firmly believe that it is crucial that children be allowed time to 'be children', to play as well as to study, and to be allowed to make mistakes and to have those mistakes accepted by those who love them as true learning experiences. My husband and I see that we are entrusted with our children's lives for just a short period of time, and in that time we should try to guide and support, to encourage and to accept. I urge all parents to keep encouraging their children, and to celebrate their successes, and to support their failures as steps towards further successes. Support their lives, even though you wish for them the things that you were not able to achieve for yourself.

保護者会だより

卒業に向けて

いよいよ卒業シーズンの到来です。今年、わが校を卒業される12年生の保護者の5名の方をお願いして卒業するお子様に
向けてのそれぞれの思いを寄せていただきました。

もう卒業？ やっと卒業？

有田耕司

ノゾミだったか下のアズサだったかの入学試験の時の保護者面接で、私は福田学園長に真顔で申し上げたものでした。「学校の施設をこうやって見せてもらったり、知っている方のお話を聞いたりすると、なるほど、良い学校だなあとは思のですが、いかんせん学費が高すぎます。何とかもうちょっと安くなりませんか？」 福田先生、超然として曰く、「高いかも知れませんが、高いだけのことはしています。」先生のおっしゃるとおり高いだけのことはある学校でした。非常に質の高い「人格」を育む教育であったと思います。「知っている」ヒトではなく「考え」「わかっている」ヒトを育む教育は、日本国旧文部省の規格品粗製濫造プログラムではややもすると定見を持ち得ずに育ってしまったであろうと思われるノゾミを、親にとって油断のならないこともままある素晴らしい人間に仕立て上げてくれました。

彼女はこの学校で一生の財産を得たと思います。とか言いながらフィレンツェの学校を出てくるときもそう思いました。要はその人の姿勢の問題でありましょう。しかしながらいくら良い姿勢を持っていても、それをスポイルしてしまう環境もあるということは忘れてはならないと思います。

というわけで父親の私はこの学校に対して良い事尽くめの印象しか持っていません。この点に関して言えば「もう卒業？」と名残を惜しみたいのですが、やっぱり学費の絶対値は家計を重く圧迫し、この点からは、「やっと卒業、

フーツ」というのが実感であります。どうも失礼いたしました。

震災後の6年

錦田靖子

中学入学試験の願書を翌日に出しに行こうと思っていた1月17日の朝、夙川の家で震災に遭い、書類は倒壊した家の中に埋もれてしまいました。幸い家族は皆無事で、混乱の中でも、延びた提出期限のお陰で受験にこぎつけることができました。お風呂にも入れず、ノメイクで、車の中にあった子供の靴袋に友人から借りたお金をチャラチャラさせながら出願を無事終えた日、梅田の地下街でバーゲンをやっていた光景が昨日のこのように思い出されます。

幸い合格。自力で脱出できなかった本人もPTSD（心的ストレス傷害）のようなものも見受けられず、避難先の甲子園から通学することになりましたが、ワンルームで3人が生活するという困難な状況が6月末まで続き、正に幸運と無理とからスタートした学校生活でした。

その後、お定まりの反抗期には、「親としてこれだけは」ということは負けずに伝え、高校に入ってからは、人間の実存にかかわる(?) 哲学的テーマの問答に付き合い、うんと年を取らされてしまいました。

海外居住経験を全く持たない一般生として、「普通」と「特殊」とが逆転したような、混沌とした不思議なこの学園で6年を過ごし、ゆったりとした時の流れの中で、心温かで個性的な友達や先生方との交わりを通して、広い

視野を手に入れ、自分というものを少しずつ形作ることができたようです。そして、そんな彼の成長と向き合うことができたのは、女ばかりの中で生きて来た私にとっても、大変なことも多かったけれど、得るものの多い貴重な経験でした。(感謝をこめて。)

大きな意味のあった時間

河野三千代

1991年、愛が小学校二年生のとき、マレーシアのクアラ Lumpur に移り住みました。すぐにインターナショナルスクールに入学しました。初日は泣きましたが、すぐに英語の生活に慣れ、楽しい4年半を過ごしました。その後、引き続いての3年間の香港ではとても小さな学校でしたので、ほとんど日本人との交流が無い生活でした。主人の帰国も近いとの事で、10年生の9月に千里国際学園に編入しました。しかしながら、最初の6ヶ月はとてもつらいものでした。学校にいても電車に乗っていても、「自分はここに belong していない。」と悲しみました。一時は息子の通っていたボーディングスクールに移る手続きも始めていたのですが、少しずつ、自分と同じ所を通してこなければならなかったお友達を作ることができ、学校生活を楽しめるようになりました。千里国際での二年半は、娘にとって、日本を知り、好きになるための時間でした。日本語にも自信がつけました。英語の力もアップしました。自分の意思でアメリカに大学進学することになりましたが、大きな意味のある時間であったと思います。本当にありがとうございました。

すべての面でプラス思考に 転じていきました

小松晴子

学園を巣立つ日が近づいてきました。6年を振り返って感無量です。

憧れて入学したものの、初めは試練の連続でした。英語が当たり前の雰囲気と積極的な級友たちに気おくれし、どんどん自信をなくしていくようでした。長い通学時間もあり、身も心もくたくたになる日が続きました。学校が楽しくてたまらないという友達の話を聞くと、親としてもひそかに焦りを感じたりもしました。

そうしたつらい日々の中に、娘の内面では成長が準備されていたようです。考えを深め、自分を表現する術を身につけました。次第に自信をつけ、すべての面でプラス思考に転じていき

ました。親も目を見張る変化でした。

そして今、進む道を定め、希望をもって大学に進もうとしています。

常によい面を見て、温かく見守り励まして下さる先生方の存在がなければ、悩むことの多かった娘はつぶれていたかもしれないと思います。本当にこの学校で育てて頂いてよかったと、感謝でいっぱいです。(素敵な図書館と司書の先生方にも感謝します)

卒業に向けて

堀野久美子

娘が千里国際に入学した頃から庭づくりを始めた。3年経ち、木も草花も成長した。太陽や土、水、肥料のお陰だと思う。人間が育つにも家庭、学校、友人などの環境がないと育たない。娘も庭のように3年間で色々なも

のが育っているようだ。

千里国際には自由がある。自分で自分の未来を選び、自己責任で教育を受ける、とても厳しい自由がある。学生一人一人の個性が生きる、少人数制の授業と教科の自己選択は素晴らしいと思う。環境が同じ花でも成長が異なるように、人も同じである。成長の個性に合わせてバックアップしてくれる学校はとてもいい。子供の行動に口やかましくなる自分と戦う3年間だった。必要な時に必要なバックアップを娘にあげたい。疲れたときに包んでやれる、あったかい毛布のような家庭を目指したが、どうだったのかわからない。皆様、娘が大変お世話になりました。ありがとうございます。

< 第7回定例会報告 >

1月11日(木)午前10時30分より会議室にて

(1) 執行部

- ・各委員会の組織構成と委員の選出方法について検討する。
- ・インターナショナルフェアの統括と見直し。・会計報告と来年度予算について。
- ・カフェテリアの改善報告。

(2) 広報委員会

インターカルチャ2月号の取材と作成。

(3) ネットワーク委員会

12月にアンケート回収。1月にアンケートの集計と報告。編入生・転出生・住所変更のお知らせ。

(4) フォーラム委員会

2月23日(金)PM3:45~PM5:00シアターにて桂都丸さんをお招きして、「落語の会」を主催予定。

(5) ボランティア委員会

12月10日オールスクールプロダクション、12月19日高等部ウィンターコンサートのティーサービス。

(6) インターナショナルフェア委員会12月7日会議室にて、S I S・O I Sのボランティアして下さった保護者と教職員、役員を招いて慰労会を開催。フェアの会計報告。

(7) 各学年委員

7年生：フェア終了後お礼状を配布。10年生：12月6日音羽寿司にて、親睦食事会。

11年生：11月11日にリーガロイヤルホテルにて、保護者親睦会を開催。父母35名出席。12月18日担任団主催の懇談会と学年旅行説明会。

< 第8回定例会報告 >

2月1日(木)午前10時30分よりシアターにて

(1) 執行部

- ・第7回定例会からの承認事項。
- ・近隣開発問題について。
- ・1月26日にカフェテリアについての継続審議を行う。
- ・保護者のネームプレートについて。

(2) 広報委員会

次年度保護者会便りについて、馬場広報センター長と執行部との話し合いをもつ。インターカルチャ2月号の発行と3月号の取材と作成。

(3) ネットワーク委員会

アンケート結果を保護者会だよりに掲載。3月に地域リーダーミーティングを予定。

(4) フォーラム委員会

2月23日(金)、シアターにて、「落語の会」開催。

1月11日に、舞台装置の確認。2月1日に校内掲示用ポスターと保護者への案内用プリント作成。

(5) ボランティア委員会

1月26・27日に高等部バスケットボール大会にて、コーチ・先生方へのランチサービス。

(7) 各学年委員会

7年生：2月10日(土)大阪梅田にて保護者親睦会。

8年生：2月中に親睦会予定。

9年生：2月19日(月)会議室にて、親睦会予定。

10年生：次期委員の依頼の手紙を配布予定。

11年生：2月中に進路に関する懇談会予定。

12年生：卒業パーティの打ち合わせ。

3～4月行事予定

月 日 曜

- 3 10 土 高等部卒業式
 13 火 冬学期終了、中等部卒業式
 13～17 高等部2年生学年旅行
 14 水 春季休暇開始
 15～16 中等部3年生学年旅行
 4 02～03 新・編入生オリエンテーション
 04 水 入学式
 05 木 春学期開始
 17～22 APAC女子バスケットボール(上海)
 18～22 APAC男子サッカー(マニラ)

春休み図書館の予定

3/14(水)～3/16(金) 閉館(蔵書点検のため)
 3/17(土)～4/4(水) 閉館(春休み)
 4/5(木)～ 8:00am-4:45pm

図書館の春の予定です。蔵書点検期間中は、図書館の利用は出来ません。

青山比呂乃(図書館)

編集後記

校長の巻頭言にもありましたように、この3月で開校以来ちょうど10年が経ちました。私はその3年目から赴任しましたので、8年間をここで過ごしたことになります。その間、1年を除いて7年間このインターカルチャーの編集をしてきました。今号で74号を数えます。このまま年6回の発行でいくと、2005年春学期に100号を迎えます。開校10年の記念すべき年に、インターカルチャー発行100号記念のことで考えてしまいました。卒業生の皆さん、今後もインターカルチャー発行のお知らせ等、SISからの連絡がほしい人は e-mail address を知らせておいて下さい。卒業後もSISを身近に感じられますよ。(馬場博史)

桃、梅、がcaおるこの季節になると今まで経験したいろんな卒業式のことを思い出されます。自分の卒業、教師となってから生徒を送りだす卒業、我が子の卒業、、、。ちょっぴりさびしくて、晴れがましくて、輝いているいろんな卒業式の思い出のなかでも、今年のSISの卒業式は、私の中できっと大きな存在として残ると思います。12年生のみなさん、もう一度、`卒業おめでとう`。(井藤真由美)

インターカルチャーへの記事・短信、また学園ホームページ等の広報活動につきましてのご意見感想などありましたら、e-mail で hbaba@senri.ed.jp までお送り下さい。インターカルチャーはバックナンバーも含めて本学園ホームページ www.senri.ed.jp/interculture でもご覧いただけます。

編集：SIS広報センター 保護者会だより記事：保護者会広報委員 カット：イラストレーションクラブ生徒

Senri International School Foundation (SISF)
 Senri International School (SIS)
 Osaka International School (OIS)
 4-4-16, Onohara-Nishi, Minoh-shi, Osaka 562-0032, JAPAN
 TEL 0727-27-5050 FAX 0727-27-5055

学校法人千里国際学園(SISF)
 千里国際学園中等部・高等部(SIS)
 大阪インターナショナルスクール(OIS)
 〒562-0032 大阪府箕面市小野原西4丁目4番16号
 電話0727-27-5050 FAX 0727-27-5055

年間発行予定と主な内容 ()は発行時期

春学期 5月号(上旬) 卒業式、入学式、大学等合格状況、APAC
 6月号(中旬) 学園祭、スポーツ表彰式
 秋学期 10月号(上旬) 夏の宿泊行事、夏の諸活動報告
 11月号(中旬) 運動会、APAC、玄関コンサート
 冬学期 2月号(上旬) オールスクールプロダクション
 3月号(中旬) APAC、入試結果、卒業生へ贈る言葉

[注] "APAC" はスポーツ公式試合

千里国際学園は、帰国生徒を中心に一般日本人生徒や日本の教育を希望する外国人生徒も受け入れて日本の普通教育を行う千里国際学園中等部・高等部 Senri International School (SIS) と4歳から18歳までの主に外国人児童生徒を対象とする大阪インターナショナルスクール Osaka International School (OIS) とを、同一敷地 校舎内に併設しています。

両校は一部の授業や学校行事・クラブ活動・生徒会活動等を合同で行っています。チームスポーツはこの2校で1チームを編成しており、この形態での参加を認めるAPAC(Asia Pacific Activities Conference)の公式試合や、近隣のインターナショナルスクール、日本の中学・高校との交流試合等に参加しています。このため、校内ではインターナショナルスクールの学校系統に合わせて、6年生～8年生日本の小学6年生～中学3年生春学期をミドルスクール(MS)、9年生～12年生(日本の中学3年生秋学期～高校3年生)をハイスクール(HS)と呼んでいます。